宇宙戦争

歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
宇宙戦争

【Ｎコード】
Ｎ５４１５Ｂ

【作者名】
歩

【あらすじ】
人類の一部が月に住むようになり、ダイス帝国を作ったり、非武装などを条件にした条約『バーラドの和約』を破った為に、地球連邦軍による軍事行動が全ての始まりだった。

プロローグ（前書き）

僕が初めて書いた小説です。
いろいろと改善点などがある未熟者の小説ですが、読んで貰えたら光栄です。

プロローグ

西暦２２５０年人類の一部は、太陽系の隣のダイス星系に住むようになった。そのため、宇宙に住む人々は地球との外交場所を月に作った。

西暦２２５２年地球とダイスの意見が対立

同年３月、ダイス星系では、自国防衛の為『ダイス軍』結成と同時に『ダイス帝国』を建国

西暦２２５７年７月２６日地球連邦政府は、ダイスに対して、戦線布告無しで、ダイス軍月面基地『フォーレ』を攻撃した事から地球、ダイス帝国での戦争が開始された。

地球連邦軍の戦力は、地球人口６５億人に対して兵員１３億人。

機動戦力宇宙艦隊２０個艦隊

首都防衛艦隊、警備艦隊、パトロール艦隊と１８の軍事拠点。

ダイス軍の戦力は、人口４２億人に対して兵員１２億人。

機動戦力宇宙艦隊３２個艦隊

月軌道艦隊、帝都防衛艦隊、警備艦隊、パトロール艦隊と月面基地

こうして、地球と月では、５０年以上に渡り戦争を繰り返してきた。

そして今、新たな戦いが始まろうとしている。

プロローグ（後書き）

どうも、宇宙戦争作者の歩と言う者です。
読んでいた人の中には、『銀河英雄伝説』に似ていると思った人もいたかも知れませんが、この小説は、『銀河英雄伝説』を参考に書いた為『銀河英雄伝説』のキャラクターも数人出ています。
プロローグで、分かりにくかった所があったら、言って下さい。
次から直せるように頑張ります。
それでは、宇宙戦争第1話をお楽しみに

第1話　第4次イサルコ星域会戦上

西暦２３０７年９月２８日この日連邦軍とダイス軍による戦闘が開始され様としていた。
この５０年間に起きた大きな会戦は、１０回
『第１次、第２次、第３次イサルコ会戦』、『アムリッツア上空戦』、『アスターテ会戦』、『第１次、第２次、月面攻防戦』、『第１次、第２次、第３次地球攻防戦』
この１０回の戦いで、地球連邦の死者３８万５千４百２０名、ダイス軍の死者２３万２千８百３７名。
１５万者の死者の違いで、連邦は、弱体化し始めた。
それでも、月との戦争は、続いた。
そして今まさに、地球と月での１１回目の戦闘が開始された。
西暦２３０７年９月２８日午前７時１３分『第４次イサルコ星域会戦』が開始した。
連邦、ダイス両艦隊から、無数のビームが飛び交い、数百隻の戦艦などが、一瞬にして、破壊された。
連邦軍は、この戦闘に、第２、第４、第６艦隊約４万隻が参加し、ダイス軍では、クルーゼ上級大将の艦隊約３万隻が参加した。
「アルス少将、君なら次にどうする？」と聞く艦隊司令のクルーゼ上級大将
「は、将官なら、敵左翼の第４艦隊から攻撃します。」と答える副官のアルス少将
「理由は？」
「敵艦隊の中で、一番数が少ないからです。」
少し考えてから、「そうだな、そうしよう。」と納得した。
「オペレータ、ケスラー中将を呼んでくれ。」と命令した。
少し立ってからモニターに艦隊副司令のケスラー中将が映った。
「ケスラー中将、貴官は、艦隊の半分を持って、敵第４艦隊を攻撃

せよ。」
「了解しました。」と言って、艦艇１万５千隻を連れて第４艦隊に攻撃しに行った。
１０時５０分ケスラー艦隊は第４艦隊の後方から攻撃した。
「なぜ、見す見す敵に後ろを取られたのだ、ホーリックはどうした。」と聞く第４艦隊司令のクレマー中将
「ホーリック分艦隊、通信途絶。」とオペレータから報告が入った。
「閣下、ご命令を」
「全艦、緊急反転後ろの敵を攻撃する。」と、命令が下った時すでに遅く、反転する艦艇は、次々に破壊され、中には艦艇同士で、ぶつかり自滅して行く者もいた。
「戦艦アウトレス、戦艦ギルファー撃沈、ムール少将、マイルス准将戦死。」
「ムール分艦隊壊滅、ホルス高速機動艦隊通信途絶。」と次々と報告が入った。
「クレマー提督このままでは、我艦隊は全滅します。」
「我艦隊はあと何隻残ったいる？」
「２千隻ばかりです。」
「副司令に通信、艦隊の半分を持って、第２艦隊の元に行けと。」
「全艦隊、攻撃開始」
これがクレマー提督最後の言葉だった。
「第４艦隊旗艦（天龍）撃破去れました。」その報告は、第２、第６艦隊司令に報告された。
第４艦隊の残存戦力千３百隻は後方で艦隊の編成をする事になった。

第1話　第4次イサルコ星域会戦上（後書き）

いよいよ本編が始まりました。
いきなり、連邦軍は第４艦隊がいきなり壊滅して、いきなりピンチの連邦軍は、この後どの様に挽回していくか次回宇宙戦争第２話『第４次イサルコ星域会戦』をお楽しみに

第2話　第4次イサルコ星域会戦中

午後1時15分『第4次イサルコ星域会戦』が開始され6時間が、経過した。
すでに、連邦軍第4艦隊が壊滅して、戦況はダイス軍が優勢だった。
そして今、ダグラス少将率いる艦艇1万5千隻が連邦軍第6艦隊に攻撃を開始した。
「全艦隊、攻撃開始」とダグラス少将の命令と共にダイス軍各艦艇から、攻撃が開始された。
だが、第6艦隊の分艦隊司令イマキ少将率いる艦艇4千隻が、ダグラス艦隊の後ろにいた。
「全艦隊、紡錘陣形ろ取りつつ、攻撃開始」両艦隊1隻また1隻と沈んで行った。
「全空母に通達、（ストライクファイター）の発進準備」とダグラスが命令した。
（ストライスファイター）とは、宇宙専用戦闘機で、ビーム砲2基とミサイルが左右2本ずつ装備している。また、連邦軍にも戦闘機があり、名前は（ワルキューレ）で、ビーム砲2基とミサイル2本を装備している。
「敵艦より、（ストライクファイター）が発進しました。」とオペレーターより報告が入った。
「こちらも、（ワルキューレ）の発進だ。」と命令した。
（ワルキューレ）が発進しようとしたが、（ストライクファイター）が空母ビームやミサイルで攻撃した。
次々に空母が沈んで行った。
「空母、全滅です。」オペレーターより報告が入った。
「そんな、馬鹿な事があるか。」と驚きを隠せないムーア
しかし、そんな彼をもっと驚かれる報告が入った。
「戦艦イストリス撃沈、イマキ少将戦死。」

「イマキ分艦隊壊滅。」とオペレータから力の無い声で報告された。
「そんな、イマキまで戦死だと。」
「司令官、すでに我艦隊は、殆どの艦が戦闘に耐えられない状態です。」
「参謀長、味方は後何隻残っている？」と聞くと
「残すところ3千隻です。」と答えた。
「そうか、オペレーター、全艦に戦線離脱を許可すると。」
「艦長、本艦は、味方が1隻でも多く脱出する為に最後まで踏み止まらなければならない。」
「了解しました。」
「攻撃開始」
これが、ムーア提督最後の言葉だった。
「第6艦隊旗艦（アンドロメダ）撃破去れました。」と報告が入った。
「第4艦隊に続き第6艦隊までもがやられたのか。」と力の無い声で言った第2艦隊司令のワーレン中将
「第6艦隊司令官代理のラップ少将です。第6艦隊残存戦力3千隻ワーレン提督の指揮下に入ります。」
「了解した。」
その頃ダイス軍では、
「クルーゼ提督、敵第6艦隊壊滅しました。」
「分かった。ダグラスに連絡5千隻程戻す様に伝えろ。」
「了解」
「それと、全軍に通達こちらに艦隊が戻り次第最後の第2艦隊を3方向から攻撃すると。」
「了解しました。」

第2話　第4次イサルコ星域会戦中（後書き）

遂に第6艦隊までもが、壊滅してしまいますます不利な連邦軍。
このまま、第2艦隊までもがやられてしまうのか？それとも救援は来るのか？次回宇宙戦争第3話『イサルコ星域会戦下』をお楽しみに

第3話　第4次イサルコ星域会戦下

午後3時40分「第4次イサルコ星域会戦」が開始され、すでに8時間が経過した。
すでに、連邦軍は、第4、第6艦隊が壊滅して、すでに勝つのは絶望的だった。
この時点で両軍の戦力は、連邦軍1万5千隻、ダイス軍2万8千隻ほとんどダイス軍が優勢だった。
「ワーレン提督、敵右翼艦隊約5千隻が、本隊に帰還します。」
「参謀長、敵の艦隊が本隊に帰還するまで何時間かかる？」
「約2時間です。」
「2時間か、よし『カレリア星域』駐留艦隊に連絡、我敵と交戦中来援を求める。」
連邦軍は、宇宙（そら）に18個の軍事拠点を持っていて、『カレリア星域』もその1つである。
その頃『カレリア星域』艦隊司令部では、
「第2艦隊司令のワーレン中将から、援軍の要請が来ておりますが、どう致しましょう？」
「見捨てる訳にはいかんだろう。」と言う基地司令のアイゼン・バルグ大将
「しかし、ここの駐留艦隊は、3個艦隊存在しますが、下手に艦隊を送れば戦線が拡大するだけですぞ。」と言う基地副司令のアイマン中将
「だからといって、第2艦隊までもが壊滅したら本国が危機に去らされるぞ。」
「第9、第14艦隊を送ってやれ」と命令が下された。
第9、第14艦隊が発進した直後に問題が起こった。
第18艦隊司令のバルク中将が心臓麻痺で亡くなった為、急遽第9艦隊が司令部の防御の為後退したのである。

「提督、『カレリア星域』駐留艦隊司令部より入電が入りました。」
「読んでみろ。」
「第１４艦隊を援軍を送ると」
「そうか、よし援軍が来るまで持ちこたえるぞ。」
それから、１時間後、両軍の配置が完了した。
「クルーゼ提督、全艦隊所定の位置に付きました。」
「全艦、攻撃開始」
「ワーレン提督、敵が攻撃を再開しました。」
「あと少しで援軍が来るのに、先頭集団攻撃せよ。」
両軍１隻また１隻と沈んでいった。
「提督、このままでは、我方の艦隊は全滅します。」
「全艦隊、小惑星まで後退せよ。」
「了解」
「クルーゼ提督、敵は小惑星まで後退します。」
「全艦隊、包囲網を引け」
「クルーゼ提督、敵の援軍が来ました。」
「ワーレン提督、味方の援軍が来ました。」
「何、本当か」クルーゼ、ワーレンの２人が叫んだ。
「第１４艦隊司令のオノ中将です。」
「第２艦隊司令のワーレン中将です。」
「援軍に感謝します。」とワーレンは敬礼した。
「クルーゼ提督、敵の艦艇数は３万隻になりました。」
「これでは、こちらが不利だな。」
「ここは、撤退か。」と考えてるとオペレーターから連絡が入った。
「ダグラス提督が艦艇３千隻を連れて、敵に攻撃をかけました。」
「何、愚か者が、すぐに呼び戻せ。」
と言ったが遅く３万隻の大群の攻撃を受けて戦死したのである。
「アルス少将どう思う？」
「そろそろ潮時では無いでしょうか。」
「貴官もそう思うか。」

「はい」
「よし、全艦後退せよ」とクルーゼが命令すると、
「信号弾あげー」とアルスが命令した。
「敵、後退します。」とオペレーターが言った。
「無理に追わなくていいぞ、負傷者を救出せよ。」と命令した。
こうして、「第４次イサルコ星域会戦」は終了した。
軍事的には、ダイス軍の勝利で合ったが、地球連邦政府の国防委員会は、この戦闘を我軍勝利と発表した。

第3話　第4次イサルコ星域会戦下（後書き）

これで、第４次イサルコ会戦は終了です。
感想などお願いします。

第４話新たなる戦い

午後４時２０分「第４次イサルコ星域会戦」は、連邦軍の敗退で終わった。
しかし、地球連邦軍国防委員会は、この戦闘を我軍の完全勝利と発表した。
この発表をした為一部の兵士が暴動を起こした。
「我軍の完全勝利なら、何故第４、第６艦隊がやられた。」
「貴様らの勝手な理由で死者を愚弄するな」
暴動を起こした兵士達が、国防委員会ビルに乗り込み憲兵や守備隊等と戦闘となり１０００人近い死者が出た。
その頃イサルコ星域では、連邦軍が、損傷した艦艇の修理や負傷者の手当て等が行われた。
この戦闘に連邦軍が導入したのが、艦艇５万５千隻、将兵７７万４千７百名その内失った艦艇２万１千３百隻将兵３４万２千名全体の半分近くを失った。
一方ダイス軍は、失った艦艇５千隻将兵４万９千名で極めて犠牲が少なかった。
それから１時間後連邦軍の第２、第４、第６、第１４艦隊が、「イサルコ星域」を撤退した。
第２、第１４艦隊は、無傷に近かったが、第４、第６艦隊は、共に副司令官が健在だが、双方の艦艇を合わせても、５千隻に満たない敗残の列だった。
第４艦隊の将官の生き残りは、副司令官と３名の准将のみ、第６艦隊の将官の生き残りは、副司令官と２名の少将と１名の准将のみであった。
それから十日後
「第４次イサルコ会戦」が終了して、十日で連邦軍は次の作戦の準備に取りかかった。

連邦軍統合作戦本部内では、次の作戦を行うかを話合っていた。
「イサルコ星域でも我々は勝ったからこのまま次の作戦を行うべきだ」と言う意見もあれば、
「いや、2個艦隊を失ったんだ、そちらの艦隊再編が先だろう。」
と言う意見もあった。
しかし、地球連邦政府の最高評議会は、次の作戦を行う事を決定した。
最高評議会の決定は絶対の為、連邦軍統合作戦本部では、次の作戦を何所で行うかを議論していた。そして、次なる作戦場所が決定した。
作戦場所『シュライク星域』
作戦参加艦隊
『ノルマン中将の第3艦隊』
『アベ中将の第7艦隊』
『三代澤大将の第１５艦隊』
『イシカワ大将の第１７艦隊』
『フォーク中将の第１９艦隊』
合わせて5個艦隊艦艇９万隻将兵１７３万名が参加する事が決定された。
連邦軍の『シュライク星域』侵攻作戦の司令官に三代澤提督、副司令官にイシカワ提督で決まった。
その情報は、すでにダイス軍の知らされた。
宇宙艦隊司令長官は、クルーゼ上級大将とケンプ、メックリンガー両大将に迎撃を命じた。
艦艇７万2千隻将兵１０５万名、連邦軍には足りないが何とか7万隻まで集まれてた。
そして、両軍が、『シュライク星域』に着いたのが１０月１３日だった。

第４話新たなる戦い（後書き）

また新たなる戦いが始まろうしています。
次こそは連邦軍が勝てるのか？それとも次もダイス軍の勝利か？
次回宇宙戦争第６話をお楽しみに

第5話シュライク星域会戦～別働作戦

１０月１６日午前９時４０分両軍が遂に砲火を交えた。
『シュライク星域会戦』が遂に開始された。
現在『シュライク星域』に居る艦隊は、連邦軍第３、第７、第１５、第１７、第１９艦隊約８万３千隻が参加し、一方ダイス軍は、クルーゼ上級大将、ケンプ、メックリンガー両大将の艦隊約７万２千隻が参加している。
午前１１時２５分戦闘は３ヶ所に別れていた。
連邦軍側入り口では、クルーゼ上級大将対連邦軍第１５、第１９艦隊、中央部では、メックリンガー大将対連邦軍第３、第１７艦隊、ダイス軍側入り口では、ケンプ大将対連邦軍第７艦隊という形になっていた。
その頃、『シュライク星域』から少し離れた『テルファー星域』で、フォーク提督率いる第１９艦隊主力艦隊約７千隻が月に向かっていた。
「フォーク提督、あと２時間程で敵首都星の軌道に入ります。」
「そうか、よし全艦隊、このまま警戒態勢のまま第２速度で敵首都星を目指す。」
「了解、全艦隊、警戒態勢のまま第２速度に移行」
なお、この別働作戦は、フォークの提案した作戦である。
３日前の司令官会議にの時
「ダイス軍は、３個艦隊約７万２千隻で防衛線を張った。」と言う総司令官の三代澤大将
「やはり、当初の予定に従い２・２・１で敵艦隊と戦いますか？」と聞く第１７艦隊司令のイシカワ大将
「それしかあるまいだが、どう艦隊を分ける？」と聞く第７艦隊司令のアベ中将
「敵の司令官はクルーゼとケンプ、メックリンガーの３人ですし、

やはり、クルーゼとケンプに2個艦隊、メックリンガーに1個艦隊という所でしょう。」と言う第3艦隊司令のノルマン中将
「その方が敵艦隊を止められるか。」と言うアベ
「その方法よりも、もっと良い作戦があるのですが」と言う第19艦隊司令のフォーク中将
「何だね、その作戦とは？」と聞くイシワカ
「まず、この『シュライク星域』から離れた『テルファー星域』に別働隊を準備します。　そして、『シュライク星域』で戦闘が開始されたら、別働隊は一挙に敵の首都を落とすのです。」と自信満々に言うフォーク
「しかし、その作戦だと、1個艦隊が抜けて、敵艦隊を押さえられなくなるぞ。」と言うアベ
「ですから、味方の主力艦隊には、囮になって貰います。」と言うフォーク
その瞬間、会議室は静寂に包まれた。
沈黙を破ったのはノルマンだった。
「なんだと、そんな馬鹿げた作戦があるか」と怒鳴るノルマン
「しかし、それ位しないとこの作戦は成功しません。」
「貴様、まだ言うか」と言うイシカワ
「ご心配なく、別働隊と言っても艦艇7千隻あれば十分です。」
「では、その作戦、貴官にやって貰おうかフォーク中将」と言う三代澤
「自分がでありますか？」と驚くフォーク
「そうだ、作戦立案者がやるべきだろう。　こちらには、オニオス副司令率いる3千隻を残せば良いだろう。」
「分かりました。　直ちに準備に取り掛かります。」と言って会議室を出て行った。
そうゆう事でこの別働作戦が開始された。
副官が司令から命令を伝えて直ぐにオペレーターから報告が入った。
「司令、正面に敵の防衛線があります。」

「何、という事は敵艦隊も居るな、索敵を急げ」と命令するフォークだが、直ぐに敵艦隊を発見した。
「2時の方向に敵艦多数」
「数はどれ位だ？」
「数、およそ1万隻！！」と驚くオペレーター
「1万隻だと、そんな馬鹿な！」と動揺するフォーク
「敵の司令官グレン中将の名で降伏を勧告しています。」
「提督、如何致します？」と聞く副官のリュッケ少尉
「決まっているだろう、総員第1次戦闘態勢」と命令するフォーク
しかし、その命令よりも早く敵が攻撃して来た。
「敵左翼艦隊より、ミサイルが発射されました。」と言った瞬間、瞬く間に前衛艦隊2千隻が消滅した。
敵艦隊は、ビームやミサイルを打ちまくり連邦軍第19艦隊は、段々痩せ細くなっていった。
そして、遂に旗艦（アルト・スティンゲル）が撃沈した。
残った艦隊は統率能力を失い死か降伏のどちらかを選んだ。
第19艦隊主力の壊滅は直ぐに各艦隊司令に報告された。
第19艦隊残存はオニオス少将の命令で、撤退を開始した。

第5話シュライク星域会戦～別働作戦（後書き）

2ヶ月ぶりに書きました。
この2ヶ月間テストや漢検などの勉強や3年間がんばった陸上の大会などあった為書けませんでした。
読んでくれた皆さん大変申し訳ありません。
これからは、ちゃんと書くので引き続き応援よろしくお願いします。

第6話シュライク星域会戦～第7艦隊離脱

午後1時15分第19艦隊別働隊は、第15艦隊の援護を受けて撤退が完了した。
その頃、『シュライク星域』ダイス軍側入り口では、ケンプ大将対第7艦隊の戦闘は凄い事になっていた。
攻勢に強い第7艦隊は、後退しているダイス軍艦艇に激突したり、零距離射撃などをして、自滅して行く艦が次々に出ていた。
「我艦隊は何をしているか」と怒鳴る艦隊司令のアベ中将
「提督、どう致します？」と聞く副官のラオ中佐
「決っているだろう、全艦隊一時後退、陣形を立て直す。」
「了解、全艦隊一時後退、陣形を立て直す。」とラオが司令官からの命令を全艦に伝えた。
命令を受けた第7艦隊は、少しずつ艦艇が戻って来るが、ケンプ艦隊で前衛艦隊を指揮していた、ベルティー少将、オルゲン少将などの攻勢派提督達は後退して行く艦隊に集中砲火を浴びせた。
「戦艦オストマイク撃沈、戦艦シュルベック通信途絶」とオペレーターから報告が入っていった。
「提督、このままでは、我艦隊の被害は増大するばかりです。」と言うラオ
「あの手を使うか。」と言うアベ
「アパッチ少将に連絡、艦隊をこの星域から離脱すると。」と命令するアベ
「提督、まさかアノ作戦をするつもりですか？」と聞く参謀長の島崎少将
「そのつもりだが」と言うアベ
「危険ではありませんか？」と言う島崎
「しかし、参謀長アノ作戦以外、我艦隊の助かる道はあるか？」と聞くアベ

「いえ、ありません」と言う島崎
「アパッチ提督より、準備が整ったと報告が入りました。」と言うラオ
「ようし、全艦隊、『シュライク星域』から出るぞ。」
と、命令が下った瞬間、第7艦隊は『シュライク星域』から離脱を始めた。
第7艦隊が、戦線離脱の報告が入った瞬間
連邦軍各艦隊司令は、総司令官からの命令で、作戦を第2段階に移行した。

第6話シュライク星域会戦～第7艦隊離脱（後書き）

遂に第7艦隊までもが離脱してしまい、もう後が無い連邦軍
しかし、アベ提督のアノ作戦とは？
その答えは、次回書きます。
それでは、宇宙戦争第7話をお楽しみに

第7話シュライク星域会戦～新の別働作戦

１時５５分連邦軍第７艦隊の戦線離脱のせいで数の上では、有利に立っていた連邦軍は、ダイス軍と互角になってしまった。
現在の戦況は、クルーゼ上級大将対連邦軍第１５艦隊、メックリンガー大将対連邦軍第１７艦隊、ケンプ大将対連邦軍第３艦隊という状況だった。
その頃、第７艦隊は、第１９艦隊主力の戦った『テルファー星域』にいた。
『テルファー星域』の防衛艦隊は、エアネス上級大将貴下の分艦隊司令グレン中将の艦隊５千３百隻とアラルコン少将の警備艦隊２千２百隻とグレイザー准将のパトロール艦隊６百２０隻とムウ准将のパトロール艦隊６百８０隻の合計８千８百隻が駐留していた。
連邦軍による連続での軍事行動により、ダイス軍の機動戦力となる主力艦隊が、下手に本国から動けない為、月基地や各星域に各艦隊の分艦隊と警備又はパトロール艦隊が防衛する事になっていた。
「グレン中将、９時の方向より新手の敵艦隊多数」と観測班から報告が届いた。
「ちっ、この忙しい時にまた敵艦隊か」と不機嫌なグレン中将
先の第１９艦隊との戦いで、旗艦が撃破されたのに、抵抗を続ける艦があった為、彼は艦艇を失ったのである。
「数はどれ位だ？」
「数、およそ１万３千隻」
「１万隻以上だと、１個艦隊はあるじゃないか」と驚きを隠せないグレン
そこに、敵艦隊の旗艦を確認していたオペレーターから報告があった。
「敵旗艦（火龍）と確認されました。」

「（火龍）と言えば、アベ中将の旗艦です。」と言う副官の森少佐
「提督、どう対処なさいますか？」と聞く参謀長のウエイン少将
「総員第１級戦闘態勢」と言った時遅く
「アラルコン少将の艦隊が迎撃に出ました。」と報告が入れば
「グレイザー准将、ムウ准将が長距離攻撃を開始しました。」と報告が入って来た。
「どいつも勝手な行動しやがって」と怒鳴るグレン
元々、急に編成された混成艦隊だから、殆ど連携が取れないのは、当たり前だった。
「司令、我艦隊はどう致しますか？」と聞かれると
「決まっている、ここは一時撤退だ。」
「しかし、戦わずして、引く訳には」と言うウエイン
「ここで我艦隊までもがやられたら、この先の星域にまとまった機動戦力は無く本国の最終防衛線まで侵入されるぞ。」と言うグレン
「了解しました。」、「直ちに艦隊を後退せよ」と命令するウエイン
「それと、エアネス閣下にも事態を報告せよ」
「了解」と言い直ぐに通信士官の元に行く森
こうして、３艦隊が戦っている間にグレン分艦隊は後退した。
敵の主力と思われる艦隊の後退をしたと聞いたアベは全艦に、こう命令を下した。
「全艦隊、砲撃開始後、母艦能力を有している艦は空戦隊を出撃せよ」
連邦軍が砲撃を開始して直ぐに、戦闘機が出撃したから、ダイス軍も航空機を出すかと思われたが、警備艦隊とパトロール艦隊には、空母どころか、戦闘機すら配備されてなかった。
艦隊と戦闘機の攻撃により、敵艦隊は１隻又１隻と沈んでいった。
午後３時１５分連邦軍第７艦隊は、無傷で『テルファー星域』を通過した。
アベの言うアノ作戦とはこの事だった。
この作戦は、フォークが会議室を出て行って直ぐに残りの艦隊司令

達が決めた事であった。
その為、第１９艦隊主力は囮に使われたのだった。
第７艦隊が『テルファー星域』を通過した事は連邦、ダイス両軍に
報告されたのであった。

第7話シュライク星域会戦～新の別働作戦（後書き）

連邦軍は、遂に『テルファー星域』を通過する事に成功しました。
果たして、このまま、敵の追撃の無いまま第7艦隊は、敵の首都星に到着出来るのでしょうか。
宇宙戦争第8話をお楽しみに

第8話シュライク星域会戦～ノルマン最後の意志

午後４時１０分連邦軍第７艦隊は、『テルファー星域』を通過し、『バラク星域』に入ろうとしていた。
その頃、『シュライク星域』では、第７艦隊を追撃しようとしているケンプ艦隊を第３艦隊が食止めていた。
しかし、数の上で不利な第３艦隊は、少しずつ艦艇が減っていった。
「ノルマン提督、このままでは我艦隊は全滅してしまいます。」と言う次席参謀の三島准将
「分かっている、全艦一時後退、陣形を立て直す。」
しかし、後退出来たのは、わずか千隻で、既に戦闘出来る艦艇など無かった。
「閣下、既に全軍の９割を失い残っている艦も戦闘に耐えられない状態です。」と報告する副官のクラウス中尉
この時、ノルマンは決断を迫られていた。
このまま、全艦隊が最後の一兵まで戦うか、それとも、１隻でも多くの艦艇を逃すべきではないのかと。
そして、彼は決断した。
「クラウス中尉、三島准将」副官と次席参謀を彼は呼んだ。
「貴官達は、艦艇３百隻を持って本国へ撤退せよ。」
「提督はどうするのですか？」と聞く三島
「貴官達が撤退するまで、敵艦隊の足止めをする。」
「閣下、それでは自殺行為です。」と言うクラウス
「それでも、ここで全滅するよりましだ。」
「閣下」
「行け、時間が無いぞ」
クラウスと三島は、司令官に敬礼して、艦橋を後にした。
この時、ノルマンに出来るのはこれ位しかなかった。
司令官が逃げ出したとなれば、残っている者達が動揺するし、死ん

でいった者達にも申し訳がたたないと思ったのである。
「艦長、これで良かったのかな？」と今更思うノルマン
「彼らはこれから、いろいろと大変でしょうけれど、きっと大丈夫でしょう。」と言う艦長
のヘルダー大佐
「そうだな、そう言えば知っているか艦長、今回新しい艦隊が出来る事を」
「初耳ですな。」
「江川中将とカールセン中将の二人が新しい艦隊司令だそうだ。」
「なら、彼らはどちらかの艦隊の所属になるでしょうが、あの二人の提督貴下なら大丈夫でしょう。」
「そうだな。」
と会話をしていたら、オペレーターから報告が入った。
「敵艦隊接近」
「クラウスと三島は撤退できたか？」とオペレーターに聞くノルマン
「戦艦４０隻、空母３０隻、巡航艦１２０隻、駆逐艦１１０隻を持ってこの空域より離脱しました。」
「そうか、離脱できたか。」
「敵艦隊、イエローゾーン突破、射程圏に入りました。」
「ファイヤー」
この言葉が、ノルマンの最後の言葉だった。
午後４時４５分第３艦隊旗艦（蒼龍）撃沈の報告が各艦隊司令に伝えられた。
その頃、『バラク星域』では、ライトナー少将の警備艦隊２０４０隻との戦闘に勝ち、艦艇修理の為一時足止めされていた。
『シュライク星域』では、第３艦隊を破ったケンプ艦隊は、『バラク星域』を目指していた。

第8話シュライク星域会戦～ノルマン最後の意志（後書き）

遂に第3艦隊は敗退してしまうが、第7艦隊は着々と敵首都星に向かっている。
はたして、第7艦隊は敵首都に行けるのだろうか？
それとも、ダイス軍の新手に妨害されるのか？
次回宇宙戦争第9話をお楽しみに

第9話シュライク星域会戦～増援

午後５時１０分連邦軍第３艦隊までもが壊滅して、残る艦隊は、第７、第１５、第１７艦隊だけだった。
この頃、一番初めに後退した第１９艦隊が、ようやく地球に戻る事が出来て、
直ぐに統合作戦本部に居る統合作戦本部長と宇宙艦隊司令長官に現在の状況を報告した。
「なるほど、第７艦隊は、『バラク星域』を突破したか。」
この時はまだ、第３艦隊壊滅は、第１９艦隊にも報告されていなかった。
「はい、しかし、第７艦隊だけでは、敵の首都星まで行けても防衛ライン突破は無理だと思います。」
きっぱり言うオニオス少将
「では、どうすれば良いかな？」と聞く統合作戦本部長のクブルスリー元帥
「第７艦隊が突破した事により敵は、混乱しています。　今、我軍にある全ての宇宙艦隊を持ってダイス軍と戦うべきです。」
「全宇宙艦隊だと！！」と驚く宇宙艦隊司令長官のロボス元帥
宇宙艦隊司令長官ロボス元帥は、統合作戦本部長であるクブルスリー元帥に次ぐ制服組のナンバー２で全ての宇宙艦隊の総司令官である。
「そうです、宇宙艦隊も警備艦隊もパトロール艦隊も首都防衛艦隊も全て投入すべきです。」と言うオニオス
「しかし、首都を守る艦隊まで出撃するのはどうかと思うが。」と言う情報主任参謀のアベルン中将
「警備艦隊やパトロール艦隊も出撃したら、各拠点までもが、無防備になるぞ。」と言う後方勤務本部長のセルト大将
「全宇宙艦隊艦隊など出撃させたら、指揮系統が崩壊するぞ。」と

言う総参謀長のグリーンヒル大将
１時間以上の議論の結果、連邦軍は、艦隊の増援を決定した。
この艦隊増援の理由の１つは、第３艦隊壊滅の報告があった為である。
増援艦隊
『トヤマ中将の第１３艦隊』
『ラップ中将の第１８艦隊』
『モートン中将の第２０艦隊』
ラップ中将は、元第６艦隊副司令官であったが、先代のバルク中将のなくなった後の後任として、艦隊司令となった。
午後７時半連邦軍増援艦隊は『シュライク星域』に出撃した。
その頃、第７艦隊は、本国を守るロベルト中将の敵防衛艦隊と遭遇した。
そして、ダイス軍に衝撃の報告が入った。
「メックリンガー大将戦死」の報告である。

第9話シュライク星域会戦～増援（後書き）

遂に第７艦隊は敵の首都にまで到着したが、そこで待っていたのは、
ロベルト中将の防衛艦隊
はたして、第７艦隊の運命は？
次回宇宙戦争第１０話をお楽しみに

第１０話シュライク星域会戦～メックリンガーの戦死

午後５時４５分『シュライク星域』の中央部では、メックリンガー大将対連邦軍第１７艦隊の戦いが行われていた。
しかし、メックリンガー艦隊は当初２万１千隻であったが、第３、第１７艦隊との戦いで殆んど艦艇がやられていた。
現在残っているのは、９千５百隻しか残ってなかった。
第１７艦隊は、第３艦隊との戦闘時に中堅で戦っていた第３艦隊がダメージを受けていた為、第１７艦隊の被害は２千隻のみで、２万隻以上の艦艇が残っていた。
しかし、イシカワは、第３艦隊と共同で戦闘していた時の事を悔やんでいた。
あの時、第１７艦隊は両翼を護っていたから、無傷に近かったが、あの時第１７艦隊が中堅を担当していたら、第３艦隊はケンプ艦隊を押さえられたのではと、そしてノルマンは死ぬ事は無かったのでは？
しかし、今のイシカワに出来る事は、第３艦隊の敵討ちと第１７艦隊の将兵の命を守る事だけだと。
「イシカワ提督、我艦隊の２割ほどがやられました。」と言う副官のハボック中佐
「ベネテルト少将、貴下の艦隊を持って右翼に回れ」と命令し、ベネテルト少将は命令どうり右翼に回り攻撃を開始した。
クライメレス准将、グライド准将、バージンガー准将達は、貴下の艦隊を持って左翼に回れ、ディーゼル中将、貴下の艦隊を持って、敵後方に回れ」と命令し次々に艦隊を動かしていく提督達。
午後６時５分メックリンガー艦隊は、第１７艦隊に囲まれていた。
午後６時２５分メックリンガー艦隊は、３千２百隻まで減ってしまい、既に戦闘継続は不可能に近かった。
「メックリンガー提督、既に艦隊の８割が失われ残る艦隊では、戦

線維持は不可能です。」
「全艦に入電、損傷艦艇を内側にして、紡錘陣形を取り、敵右翼を突破する。」
命令どうり、紡錘陣形を取り、ベネティル少将の死守する右翼艦隊へと向かった。
メックリンガー自身は、敵中に残り最後まで艦隊援護をしていたが、午後６時５５分旗艦にミサイルが４発当たり、旗艦と運命を共にした。
しかし、メックリンガーの死を覚悟した援護で残存艦隊の半数が離脱できた。
午後７時５分メックリンガー大将戦死の報告がダイス軍に伝えられた。

第１０話シュライク星域会戦～メックリンガーの戦死（後書き）

遂にこの宇宙戦争も１０話まで行けました。
メックリンガーが戦死して、不利になったダイス軍、果たして、ダイス軍は勝てるのか？
次回、『シュライク星域会戦』完結です。

第１１話シュライク星域会戦～完結

午後７時３５分『シュライク星域』では、ダイス軍最後の艦隊が、連邦軍第１５艦隊と交戦していた。
だが、ケンプ大将は第７艦隊を追ってしまい、メックリンガー大将が戦死した為、現在の状況は、ダイス軍が不利だった。
「クルーゼ提督、このままでは我艦隊は敵中に孤立します。」
「バイエルラインに連絡１万隻の艦艇を持って、我々が後退するまで時間を稼げと」
「了解しました。」
直ぐにバイエルラインに連絡をいれ、すぐさま１万隻の艦艇が倍以上ある第１５艦隊に攻撃を開始した。
午後７時５５分本隊の撤退を確認したバイエルラインは千隻ずつ後退させ、午後８時バイエルライン分艦隊は全艦後退した。
午後８時ダイス軍は『シュライク星域』を放棄した。
その頃、第７艦隊はロベルト中将率いる本土防衛艦隊と戦闘を開始した。
「アベ提督、ダイス軍が『シュライク星域』を放棄したそうです。」
「そうか、よしこちらも他の敵艦隊が来る前に決着を付けるぞ。」
「しかし提督、敵艦隊は我方より５千隻は多いのですよ。」
「分かっている、全艦隊、砲撃開始」
午後８時５分最初の攻撃は、連邦軍から開始された。
「ロベルト提督、敵の攻撃が開始されました。」
「こちらも攻撃を開始する、全艦隊、本土防衛艦隊の維持を連邦の奴らに見せてやれ。」
午後１１時２０分ロベルト中将の旗艦が撃沈すると、防衛艦隊は後退を余儀なくされた。
しかし、第７艦隊も既に６千８百隻しか残ってなかった。
「提督８時の方向にケンプ艦隊来ます。」

「数はどれ位だ？」
「およそ、１万８千隻」
「我方の３倍近くあるな、ケンプ艦隊がここに来たという事は、第３艦隊は敗北したか、ノルマン提督は無事だろうか？」
「提督、どう致します？」と聞く副官のラオ中佐
「残念だが、ここは『バラク星域』まで後退しよう。」
午後１１時２８分連邦軍第７艦隊は、月目前で後退した。
ケンプ艦隊も追撃しようとしたが、本土防衛艦隊が敗れたとなれば本国から増援が来るまでここを死守しなければならないだろうと考えた。
第７艦隊もスキがあれば攻撃しようとしたが、３０分後にテリスリー大将とバルトン中将の増援が来た為、諦めて後退した。
連邦軍は、今回の戦闘で２個艦隊失ったが、『シュライク星域』、『テルファー星域』、『バラク星域』の３星域を手に入れる事が出来たから今回は連邦軍の勝利であった。
一方のダイス軍は、３星域を取られた挙句メックリンガー大将と本土防衛艦隊司令のロベルト中将と防衛艦隊を失ったから大敗であったがこの事がきっかけで、内乱が起きようとしていた。

第１１話シュライク星域会戦～完結（後書き）

ようやく、長きに渡る『シュライク星域会戦』も終りました。
この戦いで、ダイス軍はどうなるのか？
それは、次回のお楽しみに
次回宇宙戦争第１２話をお楽しみに

第１２話反乱の序曲

地球連邦軍は手に入れた『シュライク星域』、『テルファー星域』、『バラク星域』の３星域に１個艦隊ずつ置いて、第７、第１５、第１７艦隊は後退した。
連邦軍は、このいきよいで月まで攻めるかと思われたが、さすがに第２、第３、第４、第６、第１９艦隊の再編成する為連邦軍は、一時的に攻撃出来なくなっていた。
そして、第７艦隊司令のアベ中将は、２星域を手に入れた為、大将に昇進した。
１０月１８日、『シュライク星域会戦』戦死者の追悼式が統合作戦本部の地下５階で行われていた。
最後の一瞬まで部下を救おうとしていた第３艦隊のノルマン中将は２階級特進で元帥に昇進した。
第１９艦隊のフォーク中将は大将に留まってしまった。
午前１０時、最高評議会議長の挨拶が行われ、次に国防委員長、統合作戦本部長、宇宙艦隊司令長官、『シュライク星域』侵攻作戦に参加した艦隊司令と挨拶をして行った。
午後１時、追悼式が終わり、帰ろうとした時に各艦隊司令官は第２会議場に集まるようにと命令が下った。
宇宙艦隊司令長官より、全艦隊司令官に伝えらてたのはこの時である。
「我宇宙艦隊は４個艦隊を失ったが、再編成するのは第４、第６艦隊の２個艦隊である。」この時、会議場に居た者達は驚いた。
たった半分の艦隊しか再編成しないのかと。
「第２艦隊の戦力は、第１９艦隊の残存兵力をいれ、副司令だったオニオス少将は、第２０艦隊副司令官になって貰い、第３、第４艦隊の残存兵力は現在編成中の第３首都防衛艦隊と各地の警備隊とパトロール隊で編成し、第６艦隊の残存戦力は同じく編成中の第２首

都防衛艦隊の混合で編成する。」と説明する総参謀長のグリーンヒル大将
会議は1時間足らずで終ったが、終った後も各艦隊司令の話し合いは続いた。
その頃、完全敗北したダイス軍ではエアネス上級大将を総司令とした現在の体制に不満を持つ艦隊司令達を集めて『ガイエスブルグ要塞』に立てこもった。
エアネスは、『テルファー星域』で守備艦隊していた貴下の部下が逃げた事で罪に囚われていた。
当然エアネスはグレン中将に処罰したが、ダイス帝国では、部下の罪が上官にも及ぶのである。
エアネス上級大将に続いて来たのが、ドルトルス大将、ベルグ大将、フォルス中将、ダリソン中将、バルト中将、ドリアス少将の6名である。
艦艇合わせて15万9千隻、将兵3千万人であった。
その迎撃命令を下されたのが、クルーゼ上級大将であった。

第１２話反乱の序曲（後書き）

ダイス帝国では遂に反乱が起きてしまい、連邦軍では艦隊再編成を半分しかしないと言いこのまま両国はどうなって行くのか？

次回宇宙戦争をお楽しみに

第１３話反乱の序曲～ミュラー対ダリソン

１０月２１日、エアネス上級大将討伐軍にクルーゼ上級大将が選ばれ、次にクルーゼ上級大将と共に討伐に出る艦隊が決まった。
「クルーゼ艦隊」、「ケンプ艦隊」、「ミッターマイヤー艦隊」、「ロイエンタール艦隊」「ルッツ艦隊」、「ビッテンフェルト艦隊」、「ミュラー艦隊」の７個艦隊が討伐に出る事が決まった。
１０月２３日、本土防衛艦隊の残存戦力を合わせたケンプ艦隊とテリスリー大将、バルトン中将の艦隊が首都星を守る事が決まった。
１０月２５日、ケンプ艦隊以外の各艦隊がそれぞれの戦場を目指して出撃した。
ビッテンフェルト艦隊が『ロンドベル星域』、ミュラー艦隊が『ベルリン星域』、ルッツ艦隊が『バルトリン星域』、ミッターマイヤー艦隊が『ウクイル星域』、クルーゼ、ロイエンタール艦隊が敵司令部の『ガイエスブルグ要塞』に向かった。
１０月２４日、エアネス連合軍からも各艦隊が出撃を開始した。
エアネス、ドルトルス艦隊が『ガイエスブルグ要塞』で待ち構え、ベルグ艦隊が、『ロンドベル星域』、ダリソン艦隊が『ベルリン星域』、バルト艦隊が『バルトリン星域』、フォルス艦隊が『ウクイル星域』、ドリアス艦隊が月面基地を目指した。
１０月２８日、最初の砲火は、ミュラー大将対ダリソン中将のいる『ベルリン星域』で行われた。
ミュラー艦隊の戦力は艦艇１万５千７百隻、ダリソン艦隊の戦力は艦艇１万５千３百隻と艦隊数は、ほぼ互角だが、実戦経験の差でダリソン艦隊は苦戦していた。
元々、艦隊司令官とは名ばかりのダリソンには全く戦術など無かった。
「何をしている、体当たりしてでも敵を止めろ」この命令が取り返しの付かない事になってしまった。

司令官の命令どうり敵に体当たりを行おうとした艦艇がことごとく撃破されたのである。
「閣下、命令を撤回して下さい。」
「そんな事が出来るか」
「しかし、このままだと我艦隊は壊滅してしまいます。」
司令官と参謀長がもめているとオペレーターから報告が入り、この報告がダリソンの戦意をくじかせた。
「戦艦撃沈（リューベルク）、副司令官のドーソン提督戦死」とオペレーターから報告された。
「何、ドーソンが戦死だと！」と未だ信じられないダリソン
しかし、死神の手はドーソン以外にも及んだ。
「戦艦撃沈（アリスーム）、戦艦撃沈（クルメス）、アイザー提督、ハルム提督戦死」と次々に報告が入った。
「閣下、既に艦隊の６割がやられ、残りに半数も戦闘に耐えられない状態です。」
ここで、参謀長は言葉を詰らせたが、司令官に言った。
「降伏か撤退のどちらかしかありません。」
「我艦隊に降伏も撤退も無い、あるのは玉砕のみ。」と司令官から信じられない言葉が出て艦橋は静まり返った。
旗艦の中がこうなっている時に左翼のクロイゼル少将の艦艇２２５０隻が、敵の集中砲火にさらされていた。
「通信士官、旗艦に援軍を送るように伝えてくれ。」
「旗艦と通信できず。」この返答は既に十数回目である。
「司令官は何を知てるんだ。」と舌打ちをするクロイゼル
時刻が午後９時を回った時、敵戦艦と航空機２機の攻撃を食らいクロイゼル少将の旗艦が撃沈した。
クロイゼル少将の戦死の報告は直ぐにもたらされた。
クロイゼル分艦隊の残存２９０隻が本隊の指揮下に入った直後、今度は右翼のベネル艦隊１２００隻が集中砲火の的にさらされ艦隊の半分を失い降伏した。

ベネル分艦隊が降伏すると、本隊直属のライゼル准将の艦艇７００隻は離脱し『ガイエスブルグ要塞』に戻らず、部下を本国に戻るよう命令した後、ライゼルは連邦に亡命して、第１５艦隊分艦隊司令になるが、それは別の話である。
ダリソン艦隊は残す所艦艇２８５０隻になり、司令官が旗艦の自爆を持って幕を閉じると言って、自爆スイッチを押そうとした瞬間、兵士に撃たれて死亡した。
参謀長のハルメウス少将が指揮権を引き継いだ後、降伏勧告を受諾してダリソン艦隊は敗北した。
その頃、『ロンドベル星域』でも戦闘が行われ様としていた。

第１３話反乱の序曲～ミュラー対ダリソン（後書き）

久々の投稿です。
もっと早く投稿したかったのですが、やはり受験生になるとそうは行かなくなります。
でも、もう直ぐ夏休みなのでもう少し早く投稿できるようになると思います。
では、次回も宇宙戦争をお楽しみに

第１４話反乱の序曲～ビッテンフェルト対ベルグ

１０月２８日から２９日に日付けが変わろうとしていた時に戦闘が開始された。
ここ『ロンドベル星域』では、ビッテンフェルト率いる黒色槍騎兵（シュワルツ・ランツェンレイター）とベルグ艦隊の戦闘が開始された。
戦闘は、黒色槍騎兵（シュワルツ・ランツェンレイター）が攻めて、ベルグ艦隊が守るという形になっていた。
２９日の午前２時１５分、６度目の攻撃も失敗して後退をしていた黒色槍騎兵（シュワルツ・ランツェンレイター）に対してベルグ艦隊の前衛ケイト少将とホイルン少将が追撃した為、前衛と本隊との間に隙間が出来た隙を突いて黒色槍騎兵（シュワルツ・ランツェンレイター）が突撃してきた為、ベルグ艦隊の崩壊が始まった。
「戦艦撃沈（ノルズ）、戦艦通信途絶（スタンデット）、ケイト提督戦死」
「ケイト分艦隊壊滅、エニール分艦隊通信途絶」
「戦艦撃沈（ルコスキー）、エニール提督戦死」と次々と報告が入った。
「全艦、直ちに後退せよ、再度艦隊を編成する。」と命令が下ったもの、各地で艦隊が分断され、指揮系統までもが崩壊してしまった。
「最左翼のウクレル分艦隊、敵に包囲されました。」
「カイト提督の旗艦の信号がロストしました。」
「空母（アルゼン）がカイト提督の旗艦の撃沈を確認しました。」
守備に強い艦隊は１ヶ所でも亀裂が入れば、簡単に壊滅してしまうという事が、この戦闘で証明されたのである。
「閣下、既に我艦隊は各地で分断され再集結は不可能です。」
この時ベルグは決断を迫られていた。
既に将官クラスからは、ホフマン、ケイト、カイト、エニール、カルト提督達が戦死して、ウクレル、ベルゼ、シルスが降伏して、残っている将官はベルグを含めホイルン、下北、山木、ナギトの５名だけである。
「各提督達に連絡、動力を停止して敵に降伏の意志を示せ」と各提

督達に連絡が回ると、ベルグ直属の艦隊が動力を停止させ、その後に各地に分散していた提督達も動力を停止させた。
最後まで抵抗していた艦も指揮官を失った為、艦の動力を停止させていった。
午前５時４５分にベルグ艦隊は降伏した。
その頃、『ガイエスブルグ要塞』以外の星域では戦闘が開始された。

第１４話反乱の序曲～ビッテンフェルト対ベルグ（後書き）

遂にベルグ艦隊までもが壊滅してしまいもう後が無いエアネス連合軍
このまま、敗北してしまうのだろうか？
次回も宇宙戦争をお楽しみに

第１５話反乱の序曲～ミッターマイヤー＆ルッツ対フォルス＆バルト

１０月２９日、『ガイエスブルグ要塞』では未だ睨み合いのままだったが、『バルトリン星域』、『ウクイル星域』の２星域では、戦闘が開始された。
この時期に戦闘を開始した理由は２つある。
１つは、先の戦闘でビッテンフェルト、ミュラーの両提督が勝利した事による軍事的有利差とこれ以上内乱が長引けば、連邦軍が攻めて来る可能性がある為である。
『バルトリン星域』では、ルッツ艦隊とバルト艦隊が、『ウクイル星域』では、ミッターマイヤー艦隊とフォルス艦隊がそれぞれ戦闘を行っていた。
午前１０時２０分、『ウクイル星域』では、フォルス艦隊がミッターマイヤー艦隊の後退に合わせ、『ガイエスブルグ要塞』まで撤退しようとしていた。
この戦闘は、長引けば長引くほど、フォルス艦隊が不利になるからである。
ミッターマイヤー艦隊はここを守り抜けば、援軍が来るからである。
もし、ビッテンフェルト率いる黒色槍騎兵（シュワルツ・ランツェンレイター）が援軍に来ればフォルス艦隊など簡単に壊滅してしまうからである。
「ミッターマイヤー艦隊、射程圏外まで後退しました。」とオペレーターからの報告が入ると
フォルスは直ぐに反転後退を命令した。
ミッターマイヤー艦隊がレーダーから消えるとフォルス艦隊からは、安堵の声が漏れた。
「やりましたな、司令官閣下」と参謀が言う。
「危ない所だったが、ここまで来ればミッターマイヤー艦隊とて追い付けないだろう。」とフォルスは安心していたが、オペレーターの一言で先の安心は不安えと変わっていった。

「艦隊後方、い、いや、既に本艦の隣に敵艦隊来てます。」
「な、なに！！何処の艦隊だ」とフォルスがオペレーターに確認を取らせるとオペレーターの口からありえない艦隊名が出て来た。
「み、ミッターマイヤー艦隊です。」とオペレーターから告げられた。
この時にミッターマイヤーは敵味方から疾風ウォルフと呼ばれる様になる。
「いかんな、艦隊を下がらせよ、これでは攻撃も出来ん」とミッターマイヤーが言うと艦隊は直ぐにフォルス艦隊の後ろに付き攻撃を開始した。
この攻撃で、フォルスの旗艦（セレウコン）は直撃を位、フォルスは旗艦と運命を共にした。
司令官を失ったフォルス艦隊の残存は、友軍の所まで逃げようとして、撃沈されたり、逃げ切れないと感じ敵に降伏をした。
大半の艦が後者を選んだ。
それでも敵の艦隊の攻撃を振りきった艦艇もいたが、前方からミュラー艦隊が現れて降伏を余儀なくされた。
その頃、『バルトリン星域』では、ルッツ艦隊によって壊滅的なダメージを受けながらも、バルト艦隊は必死で抵抗したが、増援のビッテンフェルトの黒色槍騎兵（シュワルツ・ランツェンレイター）の参戦で、バルト艦隊は司令官と艦隊の８割を失って降伏した。
その頃、地球連邦軍統合作戦本部の地下では、新艦隊司令の就任式が行われていた。
新第４艦隊は、旧第３、第４艦隊の残存戦力と編成途中だった第３首都防衛艦隊と各地の警備隊やパトロール隊を合わせた艦隊で、司令官は旧第４艦隊副司令官の江川少将を中将に昇進させ、新第４艦隊の司令官にした。
新第６艦隊は、残存艦艇と第２首都防衛艦隊と警備隊やパトロール隊を合わせた艦隊で、司令官は第２首都防衛艦隊司令官になる筈だったカールセン中将を第６艦隊司令にした。

そして、連邦軍は艦隊編成がすんだ為、大規模作戦を行おうとしていた。

第１５話反乱の序曲～ミッターマイヤー＆ルッツ対フォルス＆バルト（後書き）

遂に『ガイエスブルグ要塞』以外は全滅してしまったエアネス連合軍
このまま、敗北の道をたどるのか？
それとも、まだ勝機はあるのか？
そして、遂に編成が終わった連邦軍
大規模作戦とはいったい何か？
次回大規模作戦の全容が明らかに
次回も宇宙戦争をお楽しみに

第１６話月面攻略計画

ダイス帝国の内乱が終わりを向かえている頃、地球連邦軍では、第４、第６艦隊の編成が完了した。
艦隊編成終了から２日後に連邦政府では、臨時の最高評議会が行われた。
議題は、軍部から提案が合った月侵攻作戦であった。
今回の作戦参加艦隊は新設された第４、第６も含む大将以外の艦隊を投入すると言うのである。
そうすると、参加艦隊は、第５、第７、第１５、第１７艦隊を抜いた１４個艦隊を投入すると言う事である。
しかし、国防委員長より、未だ再編中の第２艦隊の投入は無理だと言う事で第２艦隊の参加は無しになった。
それでも、１３個艦隊の投入に反対の意見が出た。
財政委員長のチェン・コーウン委員長から
「これ以上戦線が拡大すれば、財政の破綻は確実だ。」と言う意見が出れば、人的資源委員長のティース委員長から
「これ以上の戦線拡大すると、社会機構は崩壊する。」と言う意見が出た。
既に、『イサルコ』、『シュライク』等の戦闘が社会機構等に大きな負担となっているのである。
「しかし、財政委員長や人的資源委員長の意見もそうだが、不経済だからとって、戦争を止める訳にはいかない。」
「なら、戦争事態を止めて、帝国と和平をするべきだ。」
「悪の根源である帝国と和平など出来るわけが無い、これは、正義の戦争なのだから。」
なら、なぜ、政府は宣戦布告無しで月基地を攻撃した？
それでよく正義の名乗る事が出来るなとチェンは思った。
「しかし、和平はともかく１３個艦隊は多すぎるのでは？」と、言

ったのは国務委員長のエニル委員長だった。
「それは、どうゆう事かねエニル委員長？」と議長が聞く
「１３個艦隊も投入したら、まず、誰がその艦隊を統率するのですか？　大将クラスがいない艦隊を長官１人で統率出来る筈が無い。」
「それはそうだが、長官と副長官の２人で統率すればよからろう。」
「しかし、副長官まで前線にでれば、残りの駐留艦隊はどうするのですか？」
と議論は続き話し合いの結果１３個艦隊から９個艦隊まで艦隊を減らしたのである。
そして、多数決の結果、１０対３で月面攻略作戦が可決された。
反対したのは、国務委員長と財政委員長と人的資源委員長の３名である。
賛成した人の殆どが、次の選挙で自分の地位を守る為である。
１１月１日になって、軍上層部では、作戦参加艦隊をどの艦隊にするか話し合いが行われていた。
そして、参加艦隊が決定した。
『トダカ中将の第１艦隊』
『江川中将の第４艦隊』
『カールセン中将の第６艦隊』
『アップルトン中将の第８艦隊』
『アム・サレム中将の第９艦隊』
『ウランフ中将の第１０艦隊』
『ホムラ中将の第１１艦隊』
『ボルディン中将の第１２艦隊』
『ラップ中将の第１８艦隊』
合わせて９個艦隊艦艇１２万３千隻将兵１７５万２千７百名と、過去最高の参加となった。
各艦隊司令官に出撃命令が下さたのは、１１月４日だった。

第１６話月面攻略計画（後書き）

遂にダイス領に侵攻する作戦が立った連邦軍
この作戦は果たして上手く行くのか？
次回は反乱の序曲完結編です。

第１７話反乱の序曲～終局

ダイス軍の内乱も残す所『ガイエスブルグ要塞』のみとなっていた。
エアネスは直ちにドルトルス大将を旗艦に呼び作戦会議を行った。
そして、１１月１日、エアネス、ドルトルス艦隊は、クルーゼ、ロイエンタール艦隊に攻撃を仕掛けてきた。
「撃て、撃て、ここで、クルーゼを倒さねば我らに勝機は無いぞ」
と言って、ドルトルスは部下に言っていた。
しかし、兵士達には既に勝利と言う言葉など関係なかった。
【生きて帰る】その事しか頭には無かったのである。
ドルトルス艦隊はクルーゼ艦隊に攻撃しないで、正面のロイエンタール艦隊に攻撃したが、距離が遠すぎて当たらなかった。
「ドルトルスも無能になったな、攻撃の距離が判らなくなるとは」
「ロイエンタール提督、こちらはどう出ますか？」
「そうだな、ゾルト少将に連絡、貴官の兵力を持って敵を分断せよ」
命令が下され、ゾルト少将は直ちに攻撃を開始したが、ドルトルス艦隊のフェリヤ少将が築いた厚い防御陣に阻まれてしまった。
突破に手間取っている間に右翼のカメイル中将、レマン准将、ボック准将の各艦隊が、ゾルト分艦隊の側面を攻撃した。
なんとかゾルト分艦隊は後退できたが、ゾルト自身が負傷してしまい、ゾルト分艦隊は後方待機になってしまった。
こうなると一時後退を余儀なくされるロイエンタールだが、レスティー少将、ガルド少将が猛攻撃をして、ロイエンタールに後退する隙を与えなかった。
「司令官は無能でも、部下まで無能とは限らんようだな。」と皮肉を言うロイエンタール
「しかし、このままでは我艦隊にいらぬ犠牲がでてしまいますぞ。」
と言う参謀長のベルゲングリューン少将
「心配するなベルゲングリューン、もう手は打ってある。」と自信

有りげに言うロイエンタール
その頃、部下達が必死で戦っているのに自分は後方の安全な所で戦況を見ているドルトレスに悲劇が起こった。
ロイエンタール貴下のアルトリンゲル少将が大回りをしてドルトルスの背後に出現したのである。
この時、ドルトルスの周りには分艦隊どころか将官が一人も居らず、旗艦護衛の３０隻の巡航艦と駆逐艦しかなかった。
アルトリンゲル艦隊は強行で来たため、かなりの艦が脱落し、２２３０隻あった艦艇の内８４０隻程しかたどりつけなかった。
しかし、今のドルトルスを攻撃するのに十分な数だった。
「敵の旗艦（オウセイ）確認、間もなく射程圏内に入ります。」とオペレーターから報告が入った。
「目標はあくまで敵旗艦１隻だ、何としても撃ち落とせよ。」と部下に言うアルトリンゲル
射程圏内に入るなり、各艦がビームとミサイルを無秩序に撃ちまくり、わずか１０分足らずで、ドルトルスの旗艦を破壊してしまった。
司令官戦死の報に各分艦隊司令は戸惑いを見せたが、次々に降伏してしまった。
ドルトルス戦死の報は直ちにエアネスの元に届いた。
「そうか、ドルトルスまでもが戦死してしまったか。」と言うエアネス
「閣下、敵はクルーゼ艦隊を中心に集結を始めています。」と言うオペレーターからの報告が入ってきた。
「通信仕官、全軍に連絡、各分艦隊を中心に降伏せよ、無駄死にはするなよ。」
「艦長、総員に退艦命令を、旗艦はこれより１５分後に自爆する。」
「閣下！！」
「何も言うな、我々は負けたのだ、元はといえば私が原因で始めた事だ、最後の責任を取らなくてはならない。」
「なら、私も残ります。」と言う声があちこちから聞こえた。

「こんな私に付き合わなくても良い。」
「閣下」
「行け、自爆まで時間が無いぞ。」それが彼らが聞いた最後の言葉だった。
総員が脱出してから直ぐに旗艦は自爆した。
エアネスと艦長の2人を乗せて
「そうか、エアネスが自害したか」と報告を受けたクルーゼ
「降伏艦をまとめたら本国に戻るぞ。」
こうして、ダイス軍の内乱は終局を迎えた。

第１７話反乱の序曲～終局（後書き）

最後に投稿してから、４ヶ月と４日が経ってしまいました。
受験勉強が忙しく書く暇がありませんでした。
これからも更新が遅れたりするかも知れませんが応援よろしくお願いします。
次回もお楽しみに

第１８話月面攻略作戦

１１月６日連邦軍９個艦隊の出撃が開始された。
宇宙口には出撃する将兵やその家族、見送りに来た仲間達で溢れかえっていた。
「しかし、編成が終わって直ぐに戦闘参加しろは無茶苦茶だよな。」と言うのは新第４艦隊司令の江川中将
「まあ、これも給料の内だから仕方なかろう。」と言うのは第１５艦隊司令の三代澤大将
江川と三代澤は幼少の時からの親友である。
「簡単に言うなよ、編成が終了してまだ日の浅い艦隊が勝つと思っているのは？」
「お前が指揮する艦隊だろ、なら大丈夫さ。」
「簡単に言ってくれるものだな。」
と、会話しているとアナウンスが流れ始めた。
「それじゃあ、そろそろ行くとするか。」
「江川、何があっても生きて帰ってこいよ。」
「そのつもりだよ。」と言い、握手をして分かれた二人
午前１０時４５分、連邦軍はロボス司令長官の指揮の下次々に発進を開始した。
連邦軍動くの報がダイス軍にもたらされたのは１１時になってからである。
ダイス軍は緊急の最高軍事会議が開かれた。
「我が軍の消耗は激しく現状では対抗できません。」と言う後方本部長のブロッス大将
「内乱鎮圧部隊と降伏した艦隊を除いてどれ位の艦隊が出撃できる？」と聞く統帥本部長のビレイヌ元帥
「現状で１２個艦隊は出撃できるが、内乱のせいで将兵の動揺が激しい為、５個艦隊が限度だ。」と言う宇宙艦隊司令長官のシュウデ

ル元帥
「5個艦隊、敵の半分程度か。」
「この際、鎮圧部隊に再度の出撃命令を」
「無理だ、補給と整備が終わっていないし、将兵が持たない。」
あれこれ議論すること1時間
「とにかく、迎撃できる艦隊は直ぐに迎撃準備をさせよう。」
こうして、ダイス軍は5個艦隊に迎撃命令を下した。

第１８話月面攻略作戦（後書き）

遂に始まった月面攻略作戦
果たして、連邦軍は勝てるのか？
次回もお楽しみに

第１９話月面攻略作戦

１１月６日に地球を出撃した連邦軍宇宙艦隊は敵の妨害も受けることなく通過して行った。
「長官、間もなく先行の第６、第１１艦隊が敵第１防衛ラインに到着します。」
「そうか、全艦隊、陣形を維持したまま第３速度から第２速度に移行」
現在の連邦艦隊の陣形は先行の第６、第１１艦隊、右翼第１０、第１２艦隊、左翼第８、第９艦隊、後方を第１、第４艦隊、長官直営の艦隊として、中央に第１８艦隊の布陣で展開している。
一方ダイス軍は月面防衛の第２防衛ラインに展開していた。
ダイス帝国軍太陽系唯一の地球攻略前線基地『アン・グライフェン月面基地』ここを失えばダイス軍は地球侵攻の足ががりを失うと同時に今後の戦闘はダイス星域内部もしくは、太陽系のダイス星域側のどちらかになってしまうため、何が何でもここを失うわけにはいかなかった。
「ヘイストル提督、全艦隊配置につきました。」
「現時刻を持って第１種警戒態勢から第２種戦闘態勢に移行する。ダイス月駐留艦隊の底力やつらに見せつけてやれ」
ダイス軍の陣形は前衛にテリスリー大将、バルトン中将の艦隊が、右翼は旧ドルトルス大将貴下のカメイル中将の艦隊が、左翼はヘルゼンバーグ中将の艦隊が、中央にはヘイストル上級大将の艦隊が布陣している。
　　それから８時間後
日付けが変わろうとした時に連邦軍が月の第１防衛ラインを通過し始めた。
防衛ラインを通過した連邦軍艦隊が次々に第１次戦闘態勢をとり始めた。

敵軍襲来の報を受けたダイス軍も各艦隊が戦闘態勢をとり始めた。
これから、大戦史上最大の戦闘が始まろうとしている。

第１９話月面攻略作戦（後書き）

皆様お久しぶりです。作者の歩です。
高校受験などがありまして作品が長期に渡り連載が停止してしまいスミマセン
無事志望校にも合格して、高校生活にもひと段落付いた為、連載を再開しました。
完全に落ちついた訳ではないので、また連載が停止してしまうかも知れませんが、応援の方よろしくお願いします。

第２０話月面攻略作戦～膠着

１１月７日に行われた戦闘は後に『第３次月面攻防戦』と呼ばれる大戦史上最大の戦闘になった。
連邦軍艦艇１２万３千隻、将兵１７５万２千７百名
ダイス軍艦艇６万８千隻、将兵１１３万６千名
と、数において圧倒的不利なダイス軍だが、艦艇の行動が制限される宙域での戦いのため、連邦軍の艦隊が自由に動くことが出来ず、全体の半分位の艦艇が行動を制限されてしまった。その為、ロボス長官の考えた大艦隊による一斉攻撃は出来なくなってしまった。
「ファイヤー」、「ファイエル」
両軍の指揮官より攻撃命令が出ると両軍からビームやミサイルが発射され、一瞬にして千隻以上の艦艇と数万人の命が宇宙空間に消えていった。
最初は両軍とも単なる砲撃戦で敵の戦力を削っていくだけだったが、だんだんとダイス軍の艦列は細くなっていった。一方連邦軍の艦列は穴が開いても、後方から次々と艦が出てきて穴を塞いでしまった。
午前６時、先に動いたのはダイス軍だった。
ダイス軍のバルトン艦隊が、連邦軍第６艦隊に攻撃をかけてきた。
「カールセン提督、どう対処しましょう？」
「シュプラン、ベルゼルの分艦隊で迎撃しつつ、艦隊陣形を紡錘陣形から凹陣形に変更。敵を三方から攻撃する。」と命令してバルトン艦隊を半包囲作戦で殲滅しようとしたが、その前にバルトン艦隊は後退してしまった。
続いてヘルゼンバーグ艦隊が第１艦隊に攻撃を仕掛けたが、トダカ中将が築き上げた防衛線の前になす術なく後退していった。
連邦艦隊が動いたのはそれから４時間後のことだった。
右翼から第１０艦隊がテリスリー艦隊に攻撃を仕掛けた。
最初は防戦だけだったが、次第に態勢を立て直し始めたテリスリー

艦隊からの砲火をくらい、第１０艦隊はセウス第７空母群を失い後退した。
両軍共、攻撃しては守るの態勢だったため戦局は膠着した。
しかし、戦闘が長引けば長引くほど、数で劣勢なダイス軍が不利になっていった。
艦列に穴が開けば連邦軍はすぐに塞ぐことが出てるが、ダイス軍は１度開いた穴は２度と塞がらないという状況だった。
その状況に亀裂が入ったのは、１１月１０日のダイス軍に増援の報がもたらされた時である。

第２０話月面攻略作戦～膠着（後書き）

遂に開始された戦闘
劣勢のダイス軍に勝機は？
次回宇宙戦争第２１話月面攻略作戦～援軍～をお楽しみに

第２１話月面攻略作戦～援軍～

大戦史上最大の戦いとなった『第３次月面攻防戦』は１１月１０日にダイス、連邦両陣営に増援の報告がされた。
このため、進軍を続けてきた連邦軍艦隊は前衛に第１、第８、第１０、第１１艦隊。中堅に第４、第６、第９艦隊。後衛に第１２、第１８艦隊を配置して、敵の出方をうかがった。

連邦軍総旗艦内

「敵の増援艦隊は３個艦隊、およそ３万５千ないし７千隻だと思われます。」
「敵にそれだけの艦隊を動員できる余裕があるとは正直、思いませんでしたな」と言うのは第１艦隊司令官のトダカ中将
「だが、何万隻増やそうと我らに勝てるはずもないのに敵もよく粘りますなぁ」
「ラップ中将、安易にこちらが勝てるなどと発言しない方がいい、地の利はてきにあるのだから」とラップ中将をいさめるのは第１０艦隊のウランフ中将
と連邦軍上層部が作戦会議している頃ダイス軍では増援に来た艦隊はわずか８千隻だという驚愕の事実が持たされた。
「それでは、残りの３万隻近くはダミー艦隊だと言うのか」と怒りに満ちた声で言うのは、ダイス軍のテリスリー大将
「さよう、上層部も何とかしようとして出来たのがこの方法だけで・・・」と言うのはダイス軍増援艦隊司令のバイタン少将
「たかだか８千隻の増援と３万隻のダミー艦隊で敵を倒せると思っている上層部の頭はどうかしている」と嘆くのはヘルゼンバーグ中将
「とにかくだ、敵のにはまだ増援艦隊がダミーだと気づかれていない、これを何とか誤魔化しつつ、戦うしかない。」とダイス軍上層部では、作戦の建て直しが議論されていた。
それから２０時間後、艦隊の補給と修理が終わった両軍は戦闘態勢

を整え始めた。

第２１話月面攻略作戦～援軍～（後書き）

最後の連載から３３７日経ってしまいました。
今後はもっと早く続きを書けるようにしたいです。

第２２話月面攻略作戦～ヘルゼンバーグの賭け～

両軍の戦闘態勢が整い両軍の戦闘が再開された。
「ファイヤー」、「ファイエル」
艦隊から発射されるビームとミサイルで瞬く間に前衛の艦艇は鉄の塊に変えられていった。
しかし、圧倒的に数の不利なダイス艦隊は１隻、１隻と減っていくたびに、艦列を細くしていった。
そんな中、ダイス艦隊から動きがあった。
左翼にいたヘルゼンバーグ中将の艦隊が連邦軍第８艦隊に接近戦を挑んできた。
「敵艦隊に近づき零距離射撃で攻撃せよ、敵の懐に入ってしまえば、迂闊に攻撃もできまい。」と敵との距離を縮めていくヘルゼンバーグ艦隊
「アップルトン提督、敵艦隊が近づいてきます。」
「後退はできるか？」
「後退すれば、第１１艦隊と衝突します。」
「左右どちらかは？」
「左によければ、第１艦隊、右によければ、第４艦隊と衝突します。」
「敵は、我が軍が密集して自由に行動ができないのを利用して攻撃を仕掛けてきています。」
「第１、第４艦隊に援護要請を第１１艦隊に我が艦隊が移動できるように艦隊を後退するように連絡を。」すぐさまアップルトンの命令は３艦隊の司令官の下にすぐに届いた。
「すぐに、艦隊を後退させ、第８艦隊が後退できるように準備を」と第１１艦隊のホムラ中将は命令するが、すぐ後ろは隕石群があり、後退できるのは全体の３割弱だと副司令から報告が入った。
「それでも、良い。とにかく第８艦隊に余裕を持たせてやれ。」第

１１艦隊が後退を始めている頃、第１、第４艦隊では援護態勢を整え始めた。
「第３、第５機動艦隊で敵をけん制しつつ、第１２ミサイル艇群で第８艦隊を援護、本隊はそのまま敵主力艦隊に攻撃を仕掛ける。」と冷静に命令を下すのは第１艦隊のトダカ中将
命令どうり次々と艦艇が移動を開始した。
しかし、旧第３、第４艦隊の残存艦隊と第３首都防衛艦隊、各地の警備隊とパトロール隊で急編成した新第４艦隊はすぐには対応ができなかった。
「新参艦隊をこんな場所に配置するなんて、ロボス司令長官は何をお考えで？」と大声で文句を言うのは第４艦隊司令の江川
「閣下、声が大きいです。」と上官に言うのは故ノルマン提督の副官クラウス大尉
「しかし、どうする？このままでは、敵にこちらが新参艦隊だとばれるぞ？」
「アルス、ヨルス両分艦隊で迎撃、残りは一時後退するべきでは？」と進言するのは、参謀長のブリッジ少将
「だが、両提督ともパトロール隊上がりだ、臨機応変には対応できないぞ？」
「しかし、両艦隊のコンビプレーは艦隊一ですし、第１艦隊もいます。」とのブリッジからの意見を聞きしばらく考え込む江川
やがて、「司令官直営に３千隻を配備し、さらに、アルス、ヨルス両分艦隊を含めた４６００隻で敵を迎え撃つ、残りの艦隊はフィッシャー少将の下で後退せよ。」と命令し、移動を開始する第４艦隊
まもなく、３個艦隊対ヘルゼンバーグ艦隊による近接戦が開始されようとしていた。

第２３話月面攻略作戦～ヘルゼンバーグの賭け～２

「ヘンゼンバーグ閣下、敵艦隊に動きがありました。」とのオペレーターからの報告が入った。
「どう動いてきた？」
「第１１艦隊の一部が後退を開始し、その前にいる第８艦隊も後退を開始。また、左翼の第１艦隊はミサイル艇を中心とした部隊が展開中。右翼の第４艦隊は艦隊の半数以上が後退、迎撃艦隊は１万隻未満と思われます。」
「迎撃部隊が１万隻未満？敵第４艦隊は何を考えているのだ？これでは我らに狙ってくれと言わんばかりではないか？」
「閣下、これは敵の罠かもしれません。当初の目的どうり第８艦隊を狙うのがよいかと思いますが？」
「そうだな、うまくいけば敵第１１艦隊も巻き込むことが出来かもしれない。よし、全艦、第８艦隊に砲火を集中せよ。」との命令が下りヘンゼンバーグ艦隊は攻撃を開始した。
一方の連邦軍艦隊では通信妨害と各艦隊の連携ミスで混乱していた。

第１１艦隊内部

「後退が遅いぞ、何やっているんだ？」と通信兵を怒鳴るホムラ
「敵の通信妨害により中盤の艦隊に指示が届いていません。」と報告していると、隣の兵士から報告が入った。
「敵艦隊の攻撃が開始されました。」
さらに、観測兵からの報告が司令部をパニックに陥れた。
「ぜ、前方の第８艦隊急速に近づいてきます。」
「何だと、こっちはまだ、後退がすんでないぞ。第８艦隊司令部にその場に留まるようにと連絡しろ。」と命令したが、通信兵からの返答は通信妨害のため連絡できずだった。
そして遂に恐れていたことが起こった。

「戦艦イストン第８艦隊の戦艦ベルーザと衝突、撃沈」、「第７７ミサイル艦艇群、味方の第１３空母隊と衝突、多数の艦がロストしました。」、「戦艦アストロン撃沈、空母シバ？通信途絶」と続々と絶望的な報告が入った。

「なんて事だ、直ぐに艦隊を後退させよ、このままでは我が艦隊は消滅するぞ。」と急いで貴下の艦隊に命令を下すが、悲劇はホムラにも起こった。

「直撃きます」と言い終わる前に第５格納庫に直撃した。さらにもう一撃、今度は正面の砲塔部に当った。被害はその２箇所以外の艦橋にもおよんだ。

副官のレイベルト中佐が起き上がった時には、ホムラは既に破損した機械の下敷きになっていた。

「閣下！ホムラ閣下！　軍医、軍医はまだか、ホムラ司令が負傷されたぞ。」

ホムラ司令負傷は直ぐに長官の他近隣の艦隊司令にも報告された。それから２時間後、第１１艦隊は副司令のハヤマ少将の指揮の下本陣まで後退した。

第２４話月面攻略作戦～第８艦隊の決断～

第８艦隊内部

「戦艦ベルーザ第１１艦隊の戦艦イストンと衝突、撃沈」、「第１３空母隊、味方のミサイル艦艇と衝突、一部の艦が消失しました。」、「戦艦ウォーリス撃沈、アザル提督戦死」次々と入る報告にアップルトン中将は愕然とした。

「くそ、何てことだ。全軍、何が何でも踏み止まれ、これ以上友軍との接触を避けるんだ。」と命令を下しても、ヘルゼンバーグ艦隊の猛攻により陣形は崩れ組織的な行動は既に不可能な状況であった。

「第１１艦隊旗艦（天龍）右舷に被弾、さらに正面にミサイル直撃」と索敵中のオペレーターからの報告がはいった。

「我が第８艦隊と第１１艦隊の被害状況は？」

「我が艦隊はアゼル分艦隊を含む前衛ならびに中盤の艦隊およそ４割方を消失、第１１艦隊は旗艦（天龍）の大破と全軍の２割弱の損失と推定。」

「天龍より通信『ホムラ司令負傷のため我が艦隊は後退する、貴官の無事を祈る』との事です。」

「了解した、貴官達も無事を祈ると返信しておいてくれ、さてと、参謀長どうする？」と、隣にいたヒエイ大佐に聞いた。

「もはや、我が艦隊は組織的な行動は不可能に近い状態であります、こうなったら、全軍による接近戦による零距離攻撃に全てを託すしかありません。」

「しかし、組織的な行動はできんのだぞ？その様な攻撃に出たら、敵の格好の餌食になるぞ？」

「ですが、その様な攻撃に出られたら、相手も迎撃しにくいものです。連携の取れない部隊ほど何をする変わらないものですから。」

「だが、その様な危険な賭けに出ても将兵はついて来るとは思えな

い。既に、後方のアベル機動艦隊等複数の部隊が後退しているのだからな。」

この時、第８艦隊の後衛部隊指揮官のアベル少将は上官の命令も無いのに後退を開始した。この後退により、後方艦隊の一部がアベル少将について行く形で敗走に近い離脱を開始した。

「右翼の第４艦隊後退を開始、左翼の第１艦隊も絶対守護ラインまで後退するもよう。」とオペレーターからの報告が入った。

「閣下、最早時間はありません。このまま後退しても艦隊行動が取れない我が艦隊では全滅するだけです。それならば、友軍艦隊の後退時間を稼ぐと同時に敵部隊に多少なりとも損害を与え、これ以上の進軍を出来ないようにするのが今取れる最善の道だと思われます。」

しばらく考えてからアップルトン中将は、全艦に総攻撃命令を下した。

第２５話月面攻略作戦～第４艦隊の決断～

連邦軍第８艦隊は旗艦（クリシュナ）を先頭に総攻撃を開始した。その予想にもしていなかった行動に、ヘンゼンバーグ艦隊は一時は陣形が崩れたが、ヘンゼンバーグ司令の指揮の下陣形を建て直し、逆に第８艦隊を迎撃していった。

第４艦隊内部

「敵艦隊の迎撃が開始されました。」オペレーターからの報告に江川は次の判断に戸惑った。

このまま後退して全軍を再編してから攻撃に参加するべきか、それとも、現状の部隊で第８艦隊に援護するべきかと。しかし、現在の第４艦隊は司令官直属の艦艇三千隻とアルス、ヨルス両分艦隊の４６００隻合わせても、７６００隻と１万隻にも満たない数しか前線にはいない。どうするべきかと江川は、隣にいたブリッジ参謀長に意見を求めた。

「どうする参謀長？こちらは今、１万隻にも満たない数だ。このまま後退するか？それとも、第８艦隊を援護するべきか？」

「本来なら、友軍艦隊を援護すべきです。しかし、こちらの艦隊は言い方は悪いですが、はっきりいって各部隊からの【寄せ集め】艦隊です。今、助けに行っても単なる足手まといになるだけではないでしょうか？それならば、一時陣形を建て直し第１艦隊と連携して、第８艦隊を援護するのが得策ではないでしょうか？」

「確かに、参謀長の言うとおりかもしれない。しかし、我々が艦隊を再編して、第１艦隊と合流してから助けに行ったとして、第８艦隊は生き残っていられるか？」

「・・・現在の第８艦隊の状況からして、難しいかもしれません。」と画面を見ながら言った。そこには現在、第８艦隊の艦艇が敵の砲撃を受けて沈んでいく姿が映っていた。

「通信兵、フィッシャー少将に通信を『前衛部隊は第８艦隊の援護

にまわる、その間に艦隊の再編を開始しろと。』」
「閣下！　この戦力で援護にまわるのですか？それでは単なる自殺行為です。」
「そうかも知れない、それでも味方を見捨てるわけにはいかない。第１艦隊のトダカ中将にも援護要請を。これより第４艦隊前衛部隊は敵艦隊に攻撃をかける。」
１時間後、第４艦隊の前衛部隊は敵艦隊に攻撃を開始した。

第２６話月面攻略作戦～連携～

連邦軍第４艦隊は壊滅状態の第８艦隊の救援をするため、ヘンゼンバーグ艦隊の右側面から攻撃をし　ようとしていた。

「全艦、攻撃開始」司令官の命令と共に艦艇からビームやミサイルが発射された。それと同時に無数の艦艇が爆発していった。

「参謀長、今の攻撃でどの程度の敵を沈められたか？」と隣にいるブリッジ参謀長に尋ねる江川

「約２０００から２５００隻のです。」

「ちっ、たったそれだけか。全艦、敵の反撃が来るぞ。迎撃用意」

撃沈数確認後直ぐに指令を出す。

「敵艦隊、我が艦隊に向けて攻撃してきました」とオペレーターから報告が入る。

それからしばらくは、艦隊同士による砲撃戦が続いていたが、第４艦隊は７６００隻に対しヘンゼンバーグ艦隊は１２０００隻と数の上で負けているうえに最近になって出来た第４艦隊では十分な指揮をとることが出来ずにいた。

一方のヘンゼンバーグ艦隊の方では第４艦隊と戦闘をしつつ猛攻撃してくる第８艦隊を防ぎながら長距離攻撃をしてくる第１艦隊をけん制しなければならないため、かなり艦隊を分散しなければならなかった。

「シュナー少将の艦隊は第８艦隊の方に砲火を集中せよ。アルナー准将、ペック准将の艦隊はミサイル艦を中心にして、敵第１艦隊を攻撃せよ。残りは第４艦隊に攻撃を集中」命令と同時にそれぞれの敵の元に向かう提督たち。しかし、約４０００弱の兵力が本隊から離れてしまい８０００隻対７６００隻となったため、第４艦隊は互角の戦いをすることができた。

「どうやら敵艦隊をうまく分散させることができましたな」と言う

副参謀長の三島
「しかし、まだ作戦は成功した訳ではない油断するな」と言うものの笑みがこぼれてしまう。
「では、閣下いよいよ作戦開始いたしますか？」
「それじゃ、開始しようか。例の部隊に伝令よろしく」
それから４０分後
ヘンゼンバーグ艦隊は攻撃を受けた。
「馬鹿な、敵はどこから攻撃してくる？」とオペレーターに尋ねるヘンゼンバーグ
「上下に誘導型機雷並びに熱反応型爆雷多数確認。それらが我が艦隊に接触して爆破したもよう」と報告をするオペレーター
これは第４艦隊本隊が戦闘をしている隙に副司令官のフィッシャー提督の指揮で工作艦が用意したものだった。
機雷と爆雷の攻撃を受けたヘンゼンバーグ艦隊は後退を余儀なくされた。
しかし、壊滅状態の第８艦隊と組織的な行動が限界に来ている第４艦隊は後退。第４、第８、第１１艦隊と抜けてしまったため、第１艦隊は前進ができず、追撃することができなかった。
未だに終わりの見えない月面攻略作戦は続くのである。

第２６話月面攻略作戦～連携～（後書き）

およそ１０ヶ月ぶりの投稿となりました。
まだまだ、終わりが見えないこの攻略作戦。次はどうなってしまうのか、それは次回のお楽しみということで、次回も楽しみに待っていてください。次はなるべく早く投稿できるようにしたいと思います。

第２７話月面攻略作戦～決断～

連邦軍は司令官が負傷した第１１艦隊、艦隊として機能していない第８艦隊、行動の限界を向かえ現在後方で補給＆艦隊の再編を開始している第４艦隊と３個艦隊が戦線離脱してしまっているが、今も６個艦隊７万隻以上の艦艇を擁しており、それに比べダイス軍は３万２０００隻＋ダミー艦２万２０００隻（連邦軍はダミー艦のことは知らない）の合わせて５万４０００隻と数の上で完全に劣っていた。

連邦軍総旗艦作戦会議室内

「・・・以上が現在の戦線の状況です」と、担当者の報告に各艦隊司令官は一喜一憂していた。

「やはり、これ程の大艦隊を持ってすればダイス艦隊など恐れる必要はないということですな」と喜びを隠せない第１８艦隊のラップ中将

その発言に多くの提督たちが同意していた。

「連邦軍有利」と出席者の多くが感じていた。

「長官、この機を逃すことはありません。直ちに６個艦隊による総攻撃をかけるべきです」と進言するのは第１２艦隊のボルディン中将

「ボルディン提督の言うとおり。今ここで前面攻勢に出て敵を殲滅。次に敵の月面基地を攻略をして月の奪還。そうすれば、ダイス軍をこの太陽系から追い出すことができます」と息巻くラップ中将

「それは時期尚早でしょう。もし、敵艦隊に総攻撃をかけると言うのであれば、現在再編中の第４艦隊の再編を待って、７個艦隊でするべきだ」と反論するのは第１艦隊のトダカ中将

トダカには先の戦いでの後悔がある。あの時、第１艦隊が前面に出て戦闘をしていれば、ホムラは負傷せず、第８艦隊も壊滅的なダメージを負わずにすんだろうし、第４艦隊にも無理な負担を与えることがなかったのではないかと。

「江川提督、第４艦隊の再編には後どの位かかるのだ？」とロボス長官が江川に尋ねる。
「そうですね。早くて後、５～６時間はかかります」と、手元の資料を見て答える江川
「そんなには待てん。そんなに待っていたら、敵の増援艦隊が再び来るかも知れん」
「それに、こちらには７万隻以上も艦艇があるのだ。今更１万隻の艦艇があろうが無かろうが大した違いではなかろう？」と提督方から反対の意見が出される。
「その増援艦隊なのだが、少々おかしいと思うんだが」と言うのは、第１０艦隊のウランフ中将
「どの辺がおかしいのだ？ウランフ提督」
「はっきりとは言えないのですが、動きが鈍いし敵も戦力として数えていない感じもしますが、一番は敵艦が攻撃してこないのです」
「攻撃してこない？そいつは妙だな。適当に集めた艦艇なら動きが鈍いのも敵が戦力外としてるのも分かるが、攻撃してこないと言うのはおかしいな」
「ええ。ですから思うにあの増援艦隊の大半はダミーなのではありませんか？」
「ダミー艦だと？そんな馬鹿な。この大事な局面で大量のダミー艦艇の投入？そんな馬鹿げた事を敵がするのは思えんが？」
「敵に余力が無いという事ではありませんか？こうも立て続けに戦闘となれば、敵さんも補給と修理も間に合わんでしょう」とウランフとロボスの議論に口を挟む江川
「なるほど。確かにダイス軍は今までの戦闘による疲弊で戦力は大幅にダウンしているはずだ」
「それに、つい先日までかの国は内戦状態だったはずだ。そのような状態では本国から月基地に補給物資が届いているとは考えにくいし、届いていたとしても完璧なはずはない」と次々に自分の考えを言う提督たち

「長官。これはチャンスかもしれません。もし仮に敵の増援艦隊の多くがダミー艦なら月基地には実戦に使える艦艇はそう多くは無いはず。第８、第１１艦隊を本国に戻し、それと入れ替えに数個艦隊の増援をして全艦隊万全の状態で総攻撃に踏み切るべきです」と提案するウランフ
「しかし、増援艦隊の出動を上（最高評議会）が許可するとは思えんが」と難色を示すロボス
ここで艦隊の増援などを要請すれば、自分の司令長官としての評価に関わるその考えがロボスの中にはあった。
「閣下。増援ではなく、別働艦隊として本国に要請すればいかがでしょう？」とロボスに提案するトダカ
「別働艦隊？どう言うことかねトダカ提督」
「増援艦隊と言うことになれば、評議会も納得しないでしょう。しかし、月面攻略の為の別働艦隊と言う事であれば評議会は許可せざるおえんでしょう。なぜなら、この戦いを月面攻略の最終決戦として議会と国民に説明し続けたのは最高評議会なのですから」
そう、最高評議会はこの戦闘をする為に月面攻略の最終決戦であると度々議会と国民に説明してなんとか承認を取り付けたのである。
「なるほどな。別働隊なら文句は言われることはあるまい。早速本国に要請しよう」と言ってロボスは参謀長に本国に要請するように命じた。
「そうなれば、敵にこちらの作戦を気取られる訳にはいかなくなったと言う事だ。当面は各艦隊は敵に長距離からの攻撃のみとして、その間に第４艦隊は編成を終了させよ。また、本国より別働艦隊の侵攻が開始されれば、その時点で第４艦隊の編成の途中でも全艦隊総攻撃を開始する。もしも別働隊の許可が下りない場合は第４艦隊の編成が完了した時点で全艦隊総攻撃、敵を殲滅したのちに月面攻略の為艦隊は月へと向かう以上。各人の奮闘に期待する」そうして、作戦会議は終わった。
「別働艦隊。軍部はともかく評議会が許可を下しますかね？トダカ

提督」と自分の艦に戻る途中隣に居たトダカに聞く江川
「出すさ。出さねばこの戦闘の意味を評議会は自分たちで無意味にしてしまうのだからな。ところで、別働隊の指揮官は誰になると思う？私はビュコック大将だと思うが、君はやはり三代澤大将だと考えるかい？」
「ミヨはこの前の戦いで司令を務めましたから、今回は人選から外れる可能性が高いでしょう。それなら、提督の言うようにビュコック提督か順番的にイシカワ提督。もしくは大将に昇進したばかりのアベ提督といった辺りでしょう」
「いずれにせよ、その貴下に加わるのは第１４艦隊のオノと第１６艦隊のユミノといったメンツか」
「でしょうね。オノ提督は第４次イサルコ戦、ユミノ提督にすれば第3次地球攻防戦以来2年ぶりの出動ですからね。現在の連邦の中で一番損害が少ない艦隊はそれ位しかないですもんね」
「それもそうだが、結局はお前に全てはかかっている。早急に艦隊の再編か完了させろよ」
「分かったいますって。全く教官は相変わらず厳しいな」と楽しそうに笑う。
トダカは江川と三代澤の士官学校の時の教官なのである。
「当然だ。艦隊司令官とは将兵の命を預かる身だ。ならば、一人でも多くの将兵の救うために万全の状態で作戦に望むべきだ。そう私はお前たちに教えたはずだが？」
「ちゃんと覚えていますよ。教官」
「ならいい。それに、お前に戦死でもされたら俺が三代澤に怒られるし、しいなさんにも顔向けできない。この作戦が終わったら式を挙げるんだったよな確か？」
「ええ、いちようその予定です。あ、式にはちゃんと来て下さいよ。招待状はちゃんと出しますから」
「分かったいる。その日に軍務が無ければ必ずいくさ。そのためにはお互い生き残らなければな。死ぬなよ江川」

「分かっていますトダカ提督。それでは、私はこちらなので失礼します」と敬礼する。
「ああ、ではまた戦場で再開しよう」と敬礼を仕返す。
そうして各提督が自分の艦隊に戻り準備を開始する。来るべき総攻撃のために。
それから4時間後、本国より別働艦隊の出動が承認された。

第２７話月面攻略作戦～決断～（後書き）

どうも、およそ1年ぶりの投稿となったしまいました。
毎回毎回早く投稿すると言いながらこのざまで申し訳ありません
次回からはもう少し早く投稿できるよう頑張りますの引き続き応援
のほうよろしくお願いします。

第２８話月面攻略作戦～全艦隊出撃～

連邦軍月面攻略艦隊が作戦準備をしている頃、地球連邦最高評議会は臨時の評議会を召集していた。議題はもちろん攻略艦隊から提案のあった別働艦隊の出動の是非についてである。

「敵主力艦隊を月攻略艦隊が押さえている間に２～４個艦隊による別働艦隊で月面基地の攻略、その後残存の敵艦隊の殲滅による太陽系の絶対防衛線の確保。以上が作戦の概要です」と説明をする国防委員長

９個艦隊を出動させて、第８艦隊の壊滅と第１１艦隊司令の負傷。すでに２個艦隊が使用不能になっているのにさらに２個艦隊以上の出動。しかも、現在待機中の艦隊はいまだ再編中の第２艦隊を除き８個艦隊はあるが、うち半数は大将階級の艦隊だ。もし大将を派遣すると言うことになれば、艦艇は３万隻を超えるし、将兵も５０万人以上なる。さすがにこれ以上の出動は連邦の財政が破綻し、何より社会機構が崩壊してしまう。はっきり言って再度の派兵は不可能。出席者の多くが感じていたが、今更反対などできない。この戦いを【月奪還の最終決戦】そう言って議会と国民に説明してきたのだから止める訳にはいかない。

「当初の月攻略にかかる費用は２２００億ディールだった。しかし、規模が増えるとなれば、費用は１３００億ディールの追加だ。もう、連邦の財政は破綻寸前だ。これ以上出費を増やすとなれば、各自治政府だけでなく国民からも反発を受ける。財政委員長として承諾はできない。もし、それでもやると言うのであれば私は財政委員長を辞任する」と評議員に説明するチェン財政委員長

「財政だけの問題ではない。多くの民間人が軍に連れて行かれているため、社会機構はズタズタだ。これ以上、犠牲が増えれば社会機構は立ち行かなくなる。２個艦隊がダメージを受けたが、幸い第１１艦隊は以前７割以上の戦力を維持しての撤退だ。現在交戦中の艦

隊を倒した後月攻略を断念して撤退すれば、多くの将兵が生きて帰ってこれる。そのうち3割の技術者を民間に復帰させてくれれば、何とか社会機構を立て直せる。撤退すべきだ」とチェンに続いて反対を表明するティース人的資源委員長
「無理だ。そんなに技術者が軍を離れれば、今度は軍の組織が維持できなくなる。人的資源委員長の言うことも分かるが、現在軍にとってここが正念場なのだ。技術者の民間復帰も月攻略作戦の中止も国防委員長として受け入れることはできない」
国防委員長に同調して増援に賛成する評議員は言う。
「それに、ここで月を奪還すれば太陽系内の敵司令部は無くなる。安全が確保されれば、軍の再編も技術者の民間復帰も財政再建もできる。ここで何としても敵司令部を潰しておくべきだ」
しかし反対派は言う
「それは、作戦が成功したときの話であろう。失敗した場合はどうする。ここで新たに2～4個艦隊を派遣して派遣艦隊を含めて全ての艦隊が全滅ないし壊滅的打撃を受けたらどうなる？数多の将兵の命と多くの艦艇を失い、地球の防衛のための戦力さえ満足に揃えられない状況になる。そうなれば、今度は我々が滅亡の危機にさらされるぞ」
賛成派、反対派双方の意見は対立したままであったが、最後は議長特権で強行採決、賛成多数で可決した。
　最高評議会での議決を受け、連邦軍統合作戦本部と宇宙艦隊司令部それに作戦参謀本部と後方作戦本部による緊急会議が行われた。そして、派遣される艦隊が決定された。
『ビュコック大将の第５艦隊』艦艇２万５０００隻　将兵３５万９６００名
『アベ大将の第７艦隊』艦艇２万２０００隻　将兵３１万８２２０名
『三代澤大将の第１５艦隊』２万４０００隻　将兵３３万６７００名
合わせて３個艦隊艦艇７万１０００隻　将兵１０１万４５２０名
軍上層部はここで大将投入による大規模艦隊で一挙に『アン・グラ

イフェン月面基地』を攻略するつもりでいた。
そのため、軍は１８個ある軍事拠点のうち木星、土星付近にある３個の軍事拠点の通信と補給の機能を残し駐留艦艇を全て引き上げ事実上放棄した。その艦艇を全て地球防衛艦隊にまわした。また、防衛艦隊臨時司令官として第１７艦隊のイシカワ大将を充て、その配下に編成途中の第２艦隊から編成が終了した艦艇６８５０隻とハヤマ少将率いる第１１艦隊の残存艦艇７０４０隻と第２０艦隊１万４０００隻で構成された。
次にダイス星系内にある連邦領『バラク星域』に第１３、第１４艦隊を駐留。これによりダイス軍を本国防衛のため留めておくと同時に増援や補給といった艦隊を月に送れないようにした。
最後に残った第１６艦隊は遊撃部隊として太陽系とダイス星系の間を行ったり来たりして、敵の艦隊を索敵と牽制の役割を担っていた。これにより、連邦宇宙軍は正規艦隊の全てを出撃させるという策に出た。
最高評議会より追加の派兵が承認されてから2日後にビュコック大将を司令官とした第2次月面攻略艦隊が本国より出撃した。

第２９話月面攻略作戦～第２次月面攻略艦隊～

１１月２１日、第２次月面攻略艦隊はダイス軍地球攻略前線基地『アン・グライフェン月面基地』攻略のため、月に向けて進軍を開始した。

第５艦隊旗艦会議室内

「しかし、『シュライク星域』攻略作戦の後、艦隊の編成途中だというのに今度は月面を攻略せよか。お偉いさんたちも無理難題を押し付けてくるぜ。これが終わったら次はダイス帝国首都星を落として来いと言うに決まってる」と上層部に不満を漏らす第７艦隊のアベ大将

「文句があるなら出撃しなければいいじゃないか？今からでも遅くはないぞ。防衛艦隊のイシカワと変わってもらえばどうだい？アベ“中将”閣下」と嫌味を言う第１５艦隊の三代澤大将

「なんだい、その歳でもうボケたのかい？今は中将ではなく貴殿と同じ大将の階級だぞ三代澤提督」

アベと三代澤、この二人はかつて同じ艦隊で分艦隊司令として競いあり、犬猿の仲でとても有名である。最初の頃は仲が好かったのだがアベの手柄を三代澤が後から来て奪い、そして先に三代澤が艦隊司令となり大将になってしまい、その事がきっかけで二人の仲は悪くなった。という事で軍部では有名な話である。しかし、お互いに相手の実力は認め合っていて互いに相手の艦隊司令として腕は褒めあっているので本当に仲が悪いのかどうかは疑問であると以前オノ中将とユミノ中将など複数の将官が酒の席で話していたことがある。

「まあ、あれじゃな。喧嘩するほど仲がいいと言う言葉の見本じゃな。」という評価を下したのが今回第２次攻略艦隊総司令官のビュコック大将であるのを二人は知らない。

「しかし、今更ぼやいた所でワシらの派遣が覆ることはあるまい。政府のお偉方は次の選挙での再選を狙っているのだからな。ここで

軍事的パフォーマンスを内外に知らしめておかねば次の選挙で自分たちが生き残れるかどうかの問題になってくるじゃからな」
「・・・私よりも政府に文句があるようですね。ビュコック提督？」
「当たり前じゃよ。奴らの都合で常に軍人は死と隣り合わせの任務をおわされる。国を護るための聖戦とか言う奴らほど口先ばかりで前線に出てこない。これでは、兵士は死んでも死にきれんよ」といって目はどこか遠くを見ている。
おそらくは死んでいった戦友たちのことを思い出してるのかもしれない。
人生の半世紀以上を軍人として戦ってきたビュコックにしか分からない何かがあるのだと二人の大将は思った。
「ビュコック閣下。第1次月面攻略艦隊より近況報告が入ってきました。」と通信士官より報告がはいると、3提督は雑談を止め報告を聞き始めた。
「それで、現在向こうの戦況はどうなんだ？」
「はい。現在第1次攻略艦隊は、敵バルトン艦隊に壊滅的打撃を与え、敵の司令官バルトン中将の旗艦を撃破したもようです。さらに、敵の増援艦隊の大多数がダミー艦艇であることが判明、これを第１０、第１８艦隊が撃破し、敵の第2次防衛線を突破。続いてバルトン艦隊を撃破した第１２艦隊も防衛線を突破。敵艦隊は、防衛線を突破した我が軍艦隊を迎撃するため、テリスリー・カメイル両艦隊を最終防衛線まで後退させたとのことです。」ここで、報告していた士官とは別の士官が新たな報告をもたらした。
「報告します。敵、月軌道艦隊を最終防衛ラインで確認したとのことです。また、第1艦隊がヘイストル艦隊を撃破。敵の司令官ヘイストル上級大将は戦死。ヘルゼンバーグ艦隊は我が軍の艦隊の進軍で手薄になった防衛線を突破。そのまま、第4、第6艦隊の攻撃を回避して戦闘宙域を離脱。敵が第2防衛ラインを放棄したのに伴い第1次攻略艦隊は最終防衛ラインに全軍進軍を開始するとのことです」

「つまり、我が軍の優勢は変わらないということか。念のため防衛・駐留・遊撃の各艦隊にヘルゼンバーグ艦隊のことを知らせておくべきでしょう」と言うと三代澤は通信士官に各部隊に報告するように命じた。
「だが、これで我々第2次攻略艦隊の行動は楽になったな。月軌道艦隊が迎撃に出たとなれば、月基地にはもうまとまった機動部隊は残っていないでしょうな」
「しかし、第1次攻略艦隊の負担はでかいだろうな。連戦続きで、今度は月の守護神の異名を持つアバエル月軌道艦隊と戦闘とは」
「じゃが、助けに行くことはできぬ。月面基地を落とす事こそこの戦闘を収束させる一番の方法じゃからの」
「・・・ここから月面基地までおよそ5時間20分。敵の艦隊がいなければ、攻略は容易いのですからね。急ぎましょう閣下」
「分かった。全艦に通達せよ。全艦隊直ちに月面基地に攻略に向かう」
かくして、第2次攻略艦隊は『アン・グライフェン月面基地』攻略のため、進軍を急いだ。
その頃、第1次攻略艦隊は月軌道艦隊との最後の戦闘に望もうとしていた。

第３０話月面攻略作戦～第２次防衛線？～

１１月１９日、連邦軍第１次月面攻略艦隊は本国より第２次月面攻略艦隊の出動が承認されたと言う報告を受け、これまでの長距離攻撃から全面攻勢に転じた。
「全軍これより総力戦を開始する。各艦隊。敵艦隊に攻撃、撃破したのちに敵防衛線を突破せよ」
ロボス長官の命令を受け連邦軍艦隊は一斉に敵艦隊に向け攻撃を開始した。

敵の突然の方針転換に戸惑うダイス軍提督たち
「なぜ、敵軍はいきなり全面攻勢出てきたのだ？今までに何度かチャンスはあったにもかかわらず、長距離攻撃のみに徹していたのに」と疑問顔のヘイストル上級大将
「もしやダミー艦隊のことがばれたのでは？後方に置いといたとはいえ一切の攻撃をしませんでしたからな」とヘイストルに答えるバルトン中将
「攻撃しないのではなく出来ないのであろうバルトン中将。言葉を間違えてはいけないな」と皮肉を言うヘルゼンバーグ中将
「その件に関しては申し訳なく思っています。ヘンゼンバーグ提督」と頭を下げる増援軍のバイタン少将
「少将、別に貴官が気にすることではない。問題はまともな戦力を戦場に届けない軍上層部の方だ。奴ら、たった一度の増援部隊を送っただけでその後は増援どころか補給物資すらこちらに送らないではないか。これで、月基地の防衛だと？上は本当に護る気があるのか？」と疑問を呈すテリスリー大将
「・・・もしかしたら、上は月基地を見捨てたのではないか？」と言うカメイル中将
「カメイル！！滅多な事を言うんじゃない。上層部が月基地の放棄

だと？そんな馬鹿なことがあるものか。ここを失えば我が軍は地球に対する侵攻基地を失うことになるのだぞ。」と部下を叱責するヘイストル

「それに、ここで月を失えば今度はダイス星系内部に軍事拠点を持つ連邦軍が有利になる。連邦は月にこの基地があるから迂闊に太陽系を離れることが出来ないのだ。ここは、敵にしろ我らにしても最重要の戦略拠点なのだ。ここをダイス軍が失うということは今度からの主戦場はダイス星系内になる。上層部もそんな愚かなことはやりはしないであろう」と月基地の重要性を説くバルトン

「・・・そうだよな。済まなかった。今のは失言であった。忘れてくれ」と皆に謝罪するカメイル

「そんなことよりも、今は敵に対してどう対処すべきかを決めるべきだ。司令には何かお考えがおありですかな？」

「・・・そうだな。ともかく、あのダミー艦を最大限活用するしかあるまい。ダミー艦に熱源探知爆雷を搭載して敵の正面に展開させよ。ダミー艦で時間を稼いでいる間に『アン・グライフェン基地』に連絡して月軌道艦隊の出撃を要請しろ」

「閣下？月軌道艦隊まで出撃したら基地には駐留艦隊が無くなります。その間に敵の別働艦隊に襲撃されでもしたらどうするのですか？」

ヘイストルの作戦案には無謀な所が多く各艦隊司令だけでなく幕僚からも反対意見が続出した。

「ではどうする？今の我らだけでは敵に突破されるのは時間の問題だ。ここで最終防衛ラインまで下がれば、月基地をさらに危険な状態にするのだ。それに、月軌道艦隊単体では敵の大艦隊を相手にしては勝ち目はあるまい。ここでこちらは現状持てる全ての戦力で敵に挑まなければ、敗北は決まったも同然だ。ならば、月軌道艦隊を含む全戦力で敵を速やかに倒し、急いで月基地まで戻る。これが、我らに出来る最善の作戦ではないか？」なおも月軌道艦隊を投入する必要性を説明するヘイストル

「ならば、閣下。月軌道艦隊をこちらに呼ぶのであれば、月軌道艦隊の一部を月基地防衛のため残すべきではありませんか？それならば、基地司令も納得するでしょうし、閣下の作戦プランを大幅に変える必要もありますまい。」とヘイストルの作戦案に一部修正案を提案するテリスリー

「・・・それが、現在の最良の案だな。了解した。今のテリスリー大将の修正案を作戦プランとして採用しよう。そうなれば、直ちに月基地に連絡して月軌道艦隊をこちらによこしてもらうようにしよう。通信仕官、直ちに月基地に連絡を取れ。私が直接基地司令に説明する。各艦隊司令はダミー艦隊で時間を稼いでいる間にそれぞれ迎撃の準備を整えておいてくれ。各人の奮戦に期待する。解散」ヘイストルの号令と共に急いで準備に移るダイス艦隊

しかし、ダイス軍が行動に移る前に連邦艦隊の総攻撃が始まってしまい、ヘイストルのダミー艦隊を使った作戦は使用することが出来ず、結局ダイス軍もその場で迎撃するしかなくなり、両軍の砲撃により戦闘は乱戦状態になってしまった。

乱戦状態となり、連邦軍は通信妨害と敵の苛烈な攻撃により指揮系統が乱れ長官の命令が各艦隊司令部に届かないという状況を作り出してしまった。

「第１２艦隊応答せよ。こちら総司令部。第１２艦隊応答せよ」

「第１０艦隊聞こえるか。第１０艦隊。聞こえたら応答せよウランフ提督」

「第９艦隊は左翼に展開中のヘルゼンバーグ艦隊に攻撃せよ。第４艦隊？違う！！第４ではなく第９艦隊だ！！第４艦隊はその場で待機だ待機！！」

「第１８艦隊に続き第６艦隊も通信が途絶。それと、第１２艦隊が指示をよこせ言っています」

このように連邦軍総司令部では命令と怒号が飛び交っていた。

「ええい、なんということだ。敵より多くの戦力を持っておるのに

これでは単なる烏合の衆ではないか」
「やはり、大将クラスが1人も居ないのが仇となりましたな。全艦隊司令官の中で総司令官代理を決めるときに揉めて決められませんでしたからな」と作戦決定時に大将が1人も入っていなかった状況と総司令代理を決められなかった事を悔やむグリーンヒル総参謀長
連邦軍では戦闘開始前に中将たちの中で総司令代理を決めようとして、一度は第1艦隊のトダカ中将で決まりそうになったが、ホムラやラップといった若手の指揮官がトダカではなくウランフを推したため、結局は総司令代理を決めることが出来なかったのである。
「今更その事を悔やんでも現状が変わる訳ではあるまい。それより、現在の各艦隊の状況は？」
「はい。現在、第9艦隊はヘルゼンバーグ艦隊と交戦中。第1艦隊はヘイストル艦隊との交戦開始を確認。第12、第18の両艦隊はバルトン艦隊と第10艦隊は敵の後方に待機中の増援艦隊と第4艦隊はカメイル艦隊とそれぞれ交戦中。第6艦隊はテリスリー艦隊と現在のところは睨み合っているだけで交戦は確認できません」
ここで通信仕官からの報告が入ってきた。
「第10艦隊より報告。敵の増援艦隊は、やはりその大多数がダミーであるとのことです」
「ダミーだと？敵は何を考えているのだ。この戦闘は敵にとってはそれほど大事な戦いではないのか？」
「閣下、敵が何を考えているかは分かりませんが、これはチャンスです。第10艦隊に敵艦隊を撃破させれば、第10艦隊は敵の防衛線を突破できます。1個艦隊でも突破すれば月基地の奪取にさらに近づきます。」
「しかし、防衛線を突破するより艦隊を反転して敵艦隊を後ろから攻撃した方が挟撃が出来て敵を殲滅出来るのではないのか？我々は敵主力艦隊をこの宙域に足止めしておくのが任務のはずだ。月基地攻略は第2次月面攻略艦隊の任務になったはずだ」
「分かっていますが、第2次攻略艦隊よりもこちらの艦隊の方が月

基地に近いです。こちらの部隊が先に少しでもダメージを与えられるのであれば、ダメージを与えておくべきです」
その時、オペレーターより報告が入った。
「敵の最終防衛線に、つ、月軌道艦隊を確認。数、２万隻以上。このままでは、挟撃されるおそれがあります」
「２万隻以上だと！！第１０艦隊の戦力は？」
「現在の戦力は１万２５００隻です」
「１万２０００か。それでは勝負にならんが仕方がない。第１０艦隊はダミー艦隊を撃破したら、第２次防衛線と最終防衛線の中間地点で待機。その場で敵の牽制をやってもらう。その他の艦隊も敵艦隊を撃破次第第１０艦隊の下に急行せよ」それぞれの艦隊に命令を下すロボス

命令を受けて第１０艦隊では命令を実行すべく敵艦隊に攻撃をかけていた。
「全艦、ダミー艦は放っておけばいい。敵の中央に固まっている艦隊に砲火を集中せよ」
ウランフは、ダミー艦隊の中に混じって指揮を執っているバイタン少将の艦隊を見つけ、そこに砲火を集中するように命じた。
バイタン艦隊は当初の８０００隻から何度かの戦闘によって４７００隻にまで数を減らしていたため、１万隻以上の艦艇を持つ第１０艦隊とは最初から勝負にもならず防戦を強いられていた。
「無理をするな。１万隻以上の敵に我々が勝つことなど不可能だ。ダミー艦を盾にしつつ月軌道艦隊の下まで後退せよ」
「ですが閣下、ここで後退などしたら第２防衛線で交戦中の他の友軍が挟撃されるのではありませんか？」
「もし、敵の第１０艦隊が反転したらこちらは前進して逆に第１０艦隊を挟撃すればいいではないか」
その時、バイタンの旗艦が激しく揺れた。直撃を受けたのだ。
「機関部被弾、大破。航行不能。さらにＢ－４２ブロックで火災発

生。消化急げ」
「被弾だと！！どこからの攻撃だ？」
「左からです。左翼に第１８艦隊！！」
「馬鹿な！！第１８艦隊だと？先ほどまでバルトン艦隊と交戦していたではないか。バルトン艦隊はどうした？」
「バルトン艦隊、旗艦ロスト。バルトン中将の生死は確認出来ず。」
「バルトン艦隊が敗れたのか。こうしてはおれん。総員退艦、旗艦を放棄する。艦隊は急速反転、月軌道艦隊のところまで後退せよ」
次々と命令を飛ばすバイタン
しかし、バイタン艦隊の後退を待つほど連邦軍も甘くはなかった。
「第２射きます。回避不能」オペレーターの悲鳴のような報告が飛び込んできた。
連邦軍の第２射は、バイタンの艦にビームが３発命中し、バイタンは脱出する前に艦と運命を共にした。
この戦闘で、バイタン艦隊は４７００隻のうち月軌道艦隊に合流できたのはわずか１２８０隻であった。
こうして、第１０、第１８艦隊は第２次防衛線を突破することが出来た。

第３１話月面攻略作戦～第２次防衛線？～

バイタン艦隊が敗れる１時間前、連邦軍第１２、第１８艦隊はダイス軍バルトン艦隊と戦闘中であった。バルトン艦隊の戦力は当初１万２０００隻あったが、この度の戦闘で艦艇数を３５００隻にまで減らしていた。一方の連邦軍は第１２艦隊は当初の１万４０００隻から９７００隻にまで減らし、第１８艦隊は当初の１万４０００隻から８８００隻にまで減らしていたが、両艦隊合わせて１万８５００隻あり、バルトン艦隊では最初から勝負にすらならなかった。それに加え、第１８艦隊司令のラップ中将の猛攻によりバルトン艦隊は劣勢に陥っていた。

「バルトン提督、敵艦隊の攻撃は苛烈でこのままでは我が艦隊は全滅します」
「分かっている。密集するな。全艦、１００単位の少数グループに分かれて分散せよ」
「提督、左右より敵第１２艦隊来ます」
「くそ。後退だ。後退して近くに居る味方に合流せよ」
「無理です。第１８艦隊の一部が我が艦隊の後方に回りました。敵に完全に囲まれています」
「敵空母より艦載機の出撃を確認。指示を」
「こちらも艦載機を出して応戦せよ」
「駄目です閣下。今出せば、混戦状態になり艦砲が撃てなく出来ます」
このようにバルトン艦隊は次々と不利な状態になっていった。
しかし、連邦軍も連携が取れている訳ではなく第１８艦隊副司令官のロングボウ少将の機転で何とか敵を囲むことが出来ただけである。
「ロングボウの奴は何を勝手なことをしているんだ？誰が敵を囲め

と言った?勝手なことをするな。そう通信を送れ」と部下の勝手な行動を他の部下に当り散らすラップ
「ですが、閣下。少将の行動で敵を囲むことが出来ましたが?」
「軟弱な第１２艦隊の力など借りてどうする?この程度の敵など我らだけでも簡単に片が付くだろ」
「・・・閣下。一度敵を包囲したんです。包囲網を解くと言うことは、敵に離脱のスキを与えるでしょう。ここは、このままで対処するのがよろしいかと」と必死にラップをなだめる参謀長のベルゼ少将
「それもそうだな。・・・よし、敵艦隊の攻撃は第１２艦隊に任せる。我が艦隊はこの戦闘が終わり次第、第１０艦隊の下に向かうぞ」
「閣下?我々は攻撃しなくていいのですか?」と聞く副官のコジマ大尉
「ふん。こんな敵など第１２艦隊だけで十分だろう。我が艦隊は次の戦闘に備えるべきだ」
「了解しました。全艦隊に通達。攻撃は第１２艦隊の任せる。我が艦隊は包囲するだけに留めよ。第１２艦隊にも連絡しとけ」
一方の第１２艦隊は第１８艦隊の一方的な通達に困惑していた。

「・・・こんな馬鹿な作戦があるか。いつから第１８艦隊は我々に命令できる程偉くなった。新参者の艦隊司令が」第１８艦隊からの通信文を見て激怒する副官のコリンズ大佐
「言葉を慎めコリンズ大佐。向こうは貴官よりも階級が上なんだぞ」と部下をなだめる司令のボルディン
「しかし閣下。いささか無礼が過ぎませんか?こちらと話し合いをして決めたのなら文句はありませんが、一方的な命令とは。そちらが勝手に決めたのであれば、文章ではなく、司令官自らが通信してくるのが礼儀でありましょう」と不信感を表情に出す参謀長のヤマムラ少将
「ラップ中将は破天荒な正確だからな。そのような事を期待してはいけないよ。それに、第１８艦隊が攻撃しないのであれば、むしろ

好都合だ。連携の取れない状態での攻撃は逆に混乱を招く。それならば、こちらだけで攻撃した方が敵を倒すのには適している」
「了解しました。では閣下、指示を」
「うむ。母艦機能を有している艦艇は艦載機を出撃させよ。それ以外は各艦の艦長の指示で任意に攻撃を継続。後は、次の命令を待て」
「了解。直ちに全艦に伝えます。通信兵全艦に通信・・・」
そう言って、参謀長は司令官の命令を通達しに行った。
「さて、ラップの行動が吉とでるか凶とでるか楽しみだな」と1人つぶやくボルディン

敵のそんな状況を知らないバルトン艦隊であるが、ボルディンの的確な指示と第18艦隊が攻撃して来ないという不気味な状態に敵艦隊は第18艦隊を警戒しつつ、第12艦隊を防御しなければならない状況になってしまった。
「なぜ、第18艦隊は攻撃してこない？これでは、第12艦隊だけに戦闘は集中していいのか？」
「いや、第12に集中することが敵の目的だ。そちらに集中している間に第18艦隊に攻撃してくるというのが敵の作戦だ」
「待て。片方の敵が攻撃してこないんだ。そこを狙って一斉砲撃で退路を確保するべきだ」
この様にバルトン艦隊の幕僚の意見が分かれており、明確な方針を決められずにいた。
この間にも艦艇の数は減っていくばかりであった。
そこにオペレーターからの報告が入った。
「攻撃多数きます。迎撃、回避どちらも不可能。直撃来ます」
その瞬間、旗艦が大きく揺れ、近くにいた護衛の駆逐艦や巡航艦などは敵の攻撃で一瞬にして撃沈。旗艦も、数十箇所に攻撃を受けた。旗艦艦橋は激しく損傷し、多くの将兵が死傷した。
「閣下！バルトン閣下！軍医、司令官が負傷された。急げ。」
奇跡的に被害を免れた幕僚の1人が破損した機材の下敷きになって

いるバルトンを見つけた。
「大佐、８時の方向より敵機きます。数１６。４時の方向からも爆撃機７」
「対空戦闘用意。付近にいる艦艇は？」
「戦艦１隻と駆逐艦４隻がいますが、戦艦は航行不能。駆逐艦も３隻大破、１隻は中破です」
「戦艦撃沈。駆逐艦も２隻撃沈。敵機の第一波きます。迎撃」
必死に敵の攻撃を防ごうとするが、被害が甚大で対空兵装の８割が沈黙していた。
迎撃を潜り抜けた戦闘機部隊は敵に攻撃を叩き込んでいく。
「第３砲塔大破、使用不能。Ｄ－３２からＥ－１６ブロックまで火災発生」
「Ｄ－３２からＥ－１６ブロックまでは放棄。軍医、閣下の状況はどうだ？」
「たった今、死亡を確認しました」軍医はそれだけ言うと、目を瞑って首を振った。
「・・・ご苦労。他の者の手当てを頼む」それだけ伝えると、大佐は上官の亡骸に向かって敬礼をした。
「３時の方向より新手の敵爆撃機。数は２０機。大佐指示を」
「指揮権を引き継ぐ。残存の対空兵器で迎撃。その間に艦橋と砲撃手以外は総員退艦せよ。付近にいる艦艇に連絡。脱出者の回収を頼むと」
「了解。対空戦闘用意。それ以外の者は退艦準備」
「大佐、敵部隊攻撃範囲に入りました」
「攻撃開始。連邦のクズ共に帝国軍人魂を見せてやれ」
それから、８分後にバルトン艦隊旗艦は撃沈した。旗艦の撃沈により、バルトン艦隊は大半が降伏。降伏を拒否した艦艇は最後まで抵抗したが、旗艦撃沈後２０分程度で鎮圧された。
残敵の掃討が開始されると、第１８艦隊は掃討戦を第１２艦隊に任せ、自分たちは第１０艦隊の下に向かった。

バルトン中将戦死の報告は敵の攻撃から逃げ延びた艦艇によって帝国軍各提督に報告された。

第３２話月面攻略作戦～第２次防衛線？～

連邦軍がバルトン、バイタン艦隊を破り、第２次防衛ラインを突破したと言う報告はダイス軍のテリスリー大将にも届いていた。
「テリスリー閣下、敵の第１０、第１８軍が防衛ラインを突破したとの事です」
「第１８軍はともかく、第１０軍が突破したのは厄介だな。第１０軍のウランフ中将は智将だからの。そんな奴が突破したとなれば、月軌道艦隊といえ、苦戦を強いられるだろう。ここから一番近い味方は誰だ？」
「現在、第４軍と戦闘中のカメイル艦隊です」
「第４軍の司令官は確か、クレマー中将だったな」
「閣下、クレマー中将は『イサルコ星域』の会戦でクルーゼ上級大将に破れ戦死しています」
「そうだったかの？それでは、今の司令官は？」
「今はクレマー中将が第４軍の司令官だった時に副司令官だった江川中将が指揮を執っています」
「江川？江川とは、第３次地球攻防戦の時Ｃ－４宙域を防御していた江川准将のことか？」
「その江川中将です」
「こりゃ驚いた。あの江川坊やが今では１個艦隊の指揮官かい。時が経つのは早いの～」
「閣下、過去を振り返るのは後にして、今は作戦指示を」
「そうじゃった。危うく忘れるとこじゃった。艦隊全軍、このまま第４軍の側面に向けて全速力で移動」
「了解しました。艦隊全軍、第４軍の側面部に向け全速力」
「さて、あのヒヨっ子准将がどこまで成長したか、ワシが確かめてやろう」

テリスリー大将にヒヨっ子呼ばわりされた江川中将の第４艦隊は現在ダイス軍カメイル艦隊と戦闘中であった。
第４艦隊は先のヘルゼンバーグ艦隊との戦闘で艦艇を１万２０００隻から９４００隻にまで数を減らしていたが、急編成の艦隊である第４艦隊は数が少なければ少ないほど連携のよくなっていった。
「アルス分艦隊はそのまま敵の最右翼。ヨルス分艦隊は右翼艦隊にそれぞれ砲火を集中。フィッシャー少将は中央部。直営艦隊は左翼に攻撃を集中すればいい。敵の数は少ないぞ。確実に１隻ずつ沈めていけばいい」
「全く、【寄せ集め】艦隊がよくここまで指揮系統も乱れず生き残れましたね。これもフィッシャー少将の艦隊移動によるものですね」
「フィッシャーの艦隊運動は名人芸さ。それもあるが、他にもあるだろ？」
「他？ああ、アルス、ヨルス両准将の連携もありましたね」
「そうじゃない。俺の素晴らしい戦術のお陰であろう。褒めていいぞ」
「・・・今は戦闘中ですよ。寝言は寝てから言ってください。閣下」
「おかしいだろ！今の発言のどこが寝言に聞こえた？」
「全部です」
「・・・なんて冷たい幕僚だ。こんな奴を幕僚として迎えなければいけないとは指揮官とは辛い役職だな」
「敵艦隊の一部、突出してきます。指示を」
「・・・後で覚えていろよ。慌てるな。攻撃しながら、少し後退して受け流せばいい」
戦闘中にも関わらず、司令官と参謀長がコントをやっていられるほど、今の第４艦隊は優勢なのである。

一方のカメイル艦隊は、ダイス帝国内で反乱を起こした旧ドルトルス大将艦隊所属であり、艦隊は混乱から立ち直っていなかったが、今回防衛軍として派遣されたのは、単に軍上層部に邪魔者として追い出されただけであり、今戦闘において1番戦力が整っていない艦隊であった。

「レマン准将の部隊が突出しすぎた。一旦下がらせろ。ガルド少将は下がりすぎだ。もっと前に出て攻撃せよ。くそ、何でこんな将官を率いて戦わねばならんのだ」

カメイル中将は自分の命令通り動けない部下に対して苛立ちを覚えていたが、それは部下の方も同じであった。自分たちはドルトルス大将に忠誠を誓ったわけであり、決してカメイルに忠誠をに誓ったわけではない。それがレマン、ガルド両提督の想いであった。

敵の艦隊は連携が取れていないと、江川は見抜いていた。連携が取れないのであれば、倒すのは簡単だが、問題はどの部隊から潰すべきか？それだけが今の考えであった。

「江川司令、一番後退している艦隊が倒すには、艦艇の数も丁度いいのではありませんか？」参謀長のブリッジ少将

「お前さんもそう思うかい？ブリッジ」

「ええ、あの艦隊を倒せれば、敵の艦隊に楔を打ち込むことも出来ます」

「なるほどな。よし、アルス、ヨルス両分艦隊に連絡。前進して後退中の敵艦隊に砲火集中せよ」

「了解。アルス准将、ヨルス准将に連絡。直ちに艦隊を前進させて・・・」

司令官の命令を伝えるよう通信兵に命令するブリッジ

「さあ、ここからが運命の分かれ道だ。頼んだぞアルス。ヨルス」

司令官の命令を受けてアルス、ヨルス艦隊はガルド艦隊に攻撃をかけようとしていた。
「よーし、どんどん撃て。撃てば当たるぞ」とただ抽象的な命令しか出さないアルス准将
「それでは駄目であろう。もっと具体的に指示を出さねば」と僚友の命令を聞いてあきれるヨルス准将
「何を言っているヨルス。あんなに密集陣形を組んでいる敵だぞ。ただ狙いをつけて攻撃すればあたるではないか？」
「だからと言って、適当に攻撃されたのではこちらの艦隊が攻撃しにくい。もっと具体的に攻撃ポイントを絞ってくれアルス」
「分かったよ。全くヨルスはめんどくさいんだからな。全艦、ヨルス准将がうるさいから敵中央部に砲火を集中」
「うるさいは余計だ。馬鹿。全部隊、アルス艦隊の攻撃を受けていない部分の敵に絞って攻撃せよ。確実に1隻1隻狙えばいいぞ。大多数の艦艇はアルス艦隊が倒してくれるからな」
「相変わらず、面倒な攻撃方法だな。お前の部下でなくてよかったよ」
「うるさい。お前の艦隊が攻撃を受けないように攻撃しているんだ。無駄口を叩く暇があるなら、敵将の1人でも倒して来い」
「敵将を倒す？おう、任せろ。1人と言わず2人でも3人でも倒してやるよ。期待して待ってろよ」
「分かった。分かった。期待して待っていてやるよ」
アルス艦隊が敵中央部に一点集中砲火で大多数の艦艇を破壊し、アルス艦隊の攻撃を免れ、反撃してくる敵をヨルス艦隊が攻撃して撃破する。士官学校でたった一文字違いという事でコンビを組んで戦い続けて以来、この戦術で幾多の敵将を倒し、多くの艦艇を破壊していったのである。

攻撃を受ける側としては勘弁して欲しい。そう思うのは当然であり、ガルド少将もその例外ではない。ただでさえ、戦力が少ないのに敵の一点集中砲火で多くの艦艇を失い、反撃をすれば別の敵が確実に反撃している艦艇を撃破してくる。戦力分散をするわけにはいかないから、また戦力を集結させる。そうすると、集中攻撃とピンポイント攻撃をくらう。これでは際限が無いではないかとガルドはあせり始めていた。カメイルに援軍を要請しても送ってこないことは明白であり、レマン艦隊は遠すぎて間に合わない。つまりは、現有戦力だけでこの戦域を維持しなければならないが、敵艦隊は４０００隻以上であるが、こちらは、１０００隻未満。すでに４倍以上の差があり、戦闘にならない事は明白であった。

「第１０８駆逐艦群はＣ７宙域に移動。第３戦隊はＢ１宙域に移動せよ。参謀長、こちらの残存艦艇は？」

「およそ、６００隻です」

「６００！！それしかないのか？」

「はい。しかも閣下、すでに弾薬切れの艦艇が出てきました。このままでは、後数十分で全艦弾薬が切れます」

「Ｂ１宙域に展開中の第３戦隊全滅。Ｃ７宙域敵艦隊の砲火集中。このままでは、第１０８駆逐艦群は全滅します」

「第１０８駆逐艦群は後退して後方の第２２空母隊の護衛に回れ」

「第６５遊撃隊弾薬切れ。第８８雷撃隊ロスト。第１戦隊全滅。ロマー准将戦死」

「第６５遊撃隊は後退。第３７雷撃隊は第６５遊撃隊の防衛ポイントに展開せよ。第２戦隊はまだ無事か？」

「第２戦隊は以前健在ですが、戦艦スエム、ラザ、ゲーベルは弾薬切れ。現在は防空に専念しています」

「スエム、ラザ、ゲーベルは第２２空母隊の対空防御につけろ」

「第３７雷撃隊、第４８空母隊ロスト。第２雷撃隊かなりの損害を出しましたが後退。マルオ大佐戦死」
ガルドの下に入ってくる報告は弾切れと部隊の全滅というのが大半であった。
「し、司令、第２５駆逐艦隊全滅。我が艦の前に展開している部隊が無くなりました。このままでは、直撃を受ける可能性があります」
「旗艦後退。旗艦の前に第２戦隊を展開してカバーせよ」
「第２２空母隊全滅。戦艦スラム、ゲーベル撃沈。ラザは撤退中」
「戦艦ジーベン、ゼルテン、ヘルツァ撃沈。本艦にミサイル多数。迎撃急げ」
第２戦隊の数が減るにつれてガルドの旗艦にも攻撃が及んでいた。
そして、迎撃虚しく２本のミサイルが直撃した。
さらに悲劇は続いた。旗艦防衛のために向かっていた戦艦ラザが機関部に被弾し、動力を失ったラザが旗艦にぶつかり爆発。ガルド少将は旗艦と戦艦ラザの爆発に巻き込まれ戦死した。

司令官を失ったガルド分艦隊は烏合の衆と化し、このまま追撃を続けていれば第４艦隊は初陣で敵艦隊を単独で倒せたかもしれないが、第４艦隊の側面にテリスリー艦隊が殺到してきて、第４艦隊は後退を余儀なくされた。
「江川司令。側面よりテリスリー艦隊が殺到してきます。その後ろに第６艦隊」
「テリスリーの爺さんめ、いつもいい所で邪魔に入る。２年前もそうだった・・・」
「第３次地球攻防戦の時のことですか？」と尋ねる副官のクラウス大尉
「そうだ、私はあの時第１５艦隊の分艦隊司令として参加していたが、あの時も敵に楔を打ち込めるというタイミングで攻撃を受けて

しまった」
「どうされます？2年前のリベンジといきますか？」
「・・・いや、ここで無理な攻撃をしてもこちらの被害が増えるだけだ。無駄な戦闘で兵士を死なせる訳にはいかない。クラウス、全艦に通達。直ちに後退して敵の次の行動に対応出来るよう準備しておけと」
「了解しました。通信兵、通信の用意を。内容は・・・」
こうして、第４艦隊は敵の攻撃を中断して後退する羽目になった。

「テリスリー閣下、第４軍後退を開始しました。後ろから第６軍も追いかけてきます」
「うむ、カメイル中将に連絡。最終防衛ラインまで後退するぞ。付いてこいと」
「了解しました。通信の準備を・・・」
「江川のヒヨっ子も少しは成長したようじゃが、まだまだよの～」
「閣下、何か言いましたか？」
「いや、気にせんでいい。年寄りは独り言が多いんじゃ」
こうして、テリスリー艦隊は犠牲という犠牲を出さずにカメイル艦隊を救出し、最終防衛ラインまで後退することが出来た。

第３３話月面攻略作戦～第２次防衛線？～

テリスリー、カメイル艦隊の後退はヘルゼンバーグ艦隊に報告された。
「テリスリー閣下が後退されたのか。となれば、この宙域に留まるのは危険だな参謀長？」
「はい。我々も後退したほうがよろしいでしょう。」
「後退？後退しても勝ち目などないだろう。ここは撤退すべきだ」
「撤退ですか！！しかし、現状後退でも難しいのですよ？それなのに撤退などそれこそ至難の業ですぞ」
「分かっている。だが、おそらく上は『アン・グライフェン基地』を放棄するつもりだろ。そうなれば、ここに残っていても無駄死にするだけだ。多少の犠牲は覚悟の上で撤退するべきだ」
「了解しました。全艦に伝達。撤退準備」
「しかし閣下。我が艦隊の残存兵力は４０００隻前後。敵の第９艦隊は１万隻以上います。加えてテリスリー、カメイル艦隊と交戦していた第４、第６艦隊も現在こちらに向かってきています」
「３個艦隊の艦艇数は？」
「はい。第４艦隊は９１００隻。第６艦隊は８８００隻。第９艦隊は１万１８００隻。合わせて２万９７００隻です」副官から敵の報告を受け、一つ決断をするヘルゼンバーグ
「艦隊全軍、敵第６艦隊に総攻撃をかける。第６艦隊を突破した後、次いで第４艦隊を撃破してこの戦場を離脱する。第９艦隊は無視しろ」
ヘルゼンバーグの命令で艦隊は次々と戦線を離脱していった。

一方の第９艦隊では、敵の突然の行動に困惑を隠せないでいた。

「敵艦隊、次々に戦線を離脱していきます」
「なぜだ？なぜ敵艦隊は防衛宙域を放棄したのだ？」副官からの報告に疑問に思い幕僚たちに意見を求めるアム・サレム司令
「敵は後退したのではありませんか？このままこの宙域を守っていても意味などほとんどないでしょう」
「いや、後退ではなく、友軍の援護をしに行ったのではないか？残る敵艦隊はヘイストル艦隊だけだ。自分の上官を見捨てて後退はありえん」
「分からんぞ。テリスリー艦隊は上官を見捨てて後退したのだぞ。ヘルゼンバーグも上官の見捨てて後退したかも知れんじゃないか」
「後退や友軍の援護と見せかけ、我々が油断するスキをついて反撃してくるつもりなんじゃないか？」
「たかだか４０００隻が反撃してこようと、敵に勝ち目などないではないか。月艦隊と合流して次の戦いに備えたに決まっている」
「４０００隻だと言って侮ってはいけない。奇襲を受ければ、我々の被害だってばかにならん。ここは、艦隊の補給と再編をして迎撃の準備をしておくべきだ」
「迎撃？その必要はないだろう。補給と編成が終わったら、こちらも第２防衛線を突破した艦隊に合流すべきだ」
「だめだ。この宙域はロボス長官のいる宙域に近い。もし敵にこの宙域を奪取されたら、長官の身に危機が迫る。我が艦隊は、総司令部の命令があるまでこの宙域を死守すべきだ」
幕僚たちの議論を聞き、最終的にアム・サレム艦隊の補給と再編のち、総司令部の命があるまでこの宙域の防衛に専念することを決めた。

第９艦隊の追撃を無いことを確認したヘルゼンバーグは、隕石群の中に身を潜め機関部などを損傷した艦の人員を別の艦に移して撤

退の機会をうかがっていた。
「閣下、機関部を損傷した艦を全て放棄なされるのですか？大破や中破艦はともかく、小破艦艇までも放棄とやりすぎなのでは？更に戦力の減少に繋がりますが」
「構わない。我々は後退するのではなく、撤退するのだ。機関部を被弾した艦はいつトラブルを起こすか分からないからな。それに、数が少なければ少ないほど撤退しやすい」
「了解しました。兵の移動を急がせます」
「頼むぞ。時間がかかれば、その分敵に見つかる可能性も増える」
「了解しました。副司令に連絡。兵士の収容はどの位完了しているんだ？」
「中佐。現在の我が艦隊の兵力は？」
ヘルゼンバーグは側にいた幕僚の１人に尋ねた。
「はい。第９艦隊との戦闘で失った艦艇は８２２隻。現在放棄中の艦艇は３６１隻ですが、この数は以前増えておりますので、最終的には５００隻を超えるものと思われます」
「・・・艦隊は３０００隻を割ったのか。機関部被弾によって放棄する艦艇以外での艦隊の損害は？」
「戦闘で失った艦艇と現在放棄している艦艇を除いて、現在艦艇は２８１７隻。これにこの後１５５隻が機関部被弾で放棄されますから、残りは２６６２隻。無傷の艦艇は１９７隻。大破５６３隻。中破７１１で小破は１１９１隻です。このうち、放棄する艦艇のパーツを使って修理が完了した艦が３６隻。応急処置の艦が４１７隻です。後は駄目です。この場で修理は出来ません」
「・・・大破もしくは中破した艦で戦闘が不可能な艦も放棄。これで残りの戦力は？」
「大破した艦艇は４１８隻。中破した艦ですと、４９０隻です。残存艦艇は１７５４隻です」
「２０００隻を割り込むのか。・・・その中で、応急処置でなんとか戦闘できるまで回復できる艦艇数は？」

「直ぐに技師長に確認してみます。君、技師長を呼び出してくれ」
「了解。こちら艦橋、技術部聞こえるか・・・」
「なんとか多くの艦艇が使えるようになればよいが・・・」
５分後
「閣下。技師長より報告が入りました」
「技師長はなんと？」
「はい。大破した艦は無理ですが、中破した艦なら5～１２隻程度なら直ぐに何とかなるとのことです。あと5時間あれば、中破した艦艇を１００隻は何とかできるとのことです」
「5時間は無理だ。仕方ない。今すぐ応急処置ができる艦だけにしよう。技師長にそう伝えてくれ」
「了解しました。おい、技師長とはまだ繋がっているか」
「・・・さて、後は２０００隻未満の艦艇でどうしたものか？」

戦闘を終了させた第４、第６艦隊は次なる敵を目指して第９艦隊と合流したが、敵が敗走したと旨をアム・サレムより報告された。
「では、敵は後退したと？そう言うことですかな提督？」第９艦隊の報告を再度確認する江川
「そうだ。この宙域での戦闘は2時間ほど前に終結した。この宙域の防衛は第９艦隊だけで大丈夫だ。第４、第６の両艦隊は第１艦隊の援護か総司令部の防御。もしくは、現在最終防衛線攻略のため集結中の友軍艦隊の下に行ってくれ」
「なら、この宙域に我々がいても仕方がありませんな。カールセン提督。提督はどうされますか？」
「ワシは、この宙域を放棄した敵の捜索をしようと思うんじゃが」
「敵の捜索ですか？まだこの辺にいますかね？」
「分からん。だが、気になるんじゃよ」
「分かりました。それでは、私は念のため総司令部の警護に行きま

す」
「うむ。何かあったら直ぐに連絡をくれ。直ぐに駆けつけるからの。それでは、アム・サレム提督。後は任せます」
「了解しました。そちらもご武運を」
こうして、３提督はそれぞれの任務を遂行するために行動に移った。

その頃、ヘルゼンバーグ艦隊も全ての準備が完了していた。
「ヘルゼンバーグ閣下。乗員の収容完了しました。残存艦艇１７６２隻。いつでも出撃できます」
「よしそれでは、これより移動を開始する。全艦、第１種警戒態勢で移動を」
その時、オペレーターより急報が入った。
「て、敵です。１０時の方向。距離３２００」
「・・・近くだな。丁度いい。放棄した艦艇を遠隔で操作。月側に最大速度で移動させよ」
「損傷の度合いによって速度は変わりますが、よろしいですか？」
「かまわん。敵が囮の艦隊に引っかかってくれれば、こちらの脱出も成功率が高くなる」
「了解。廃棄艦を遠隔操作。月に向けて移動させます」

敵艦隊の捜索中の第６艦隊は月の方に移動する艦隊を見つけるの時間の問題だった。
「カールセン提督。８時の方向に敵の艦隊。数は不明です」
「不明？不明とはどういうことだ。観測できないのか？」
「それが、敵の移動速度がバラバラで、観測が出来ません」
「移動がバラバラ？時間差をつけて移動しているのか？」

「いえ。どうやら、機関部にダメージを受けている艦艇が多いようです。ダメージの程度によって、だせる速度が違うもようです」
「機関部にダメージか。ならば、そう速く移動は出来まい。全艦、直ちに敗走する敵艦隊を追撃する。敵との接触時間は？」
「ここからですと、２０分弱はかかります」
「ならば、念のために集結中の艦隊に連絡を入れておけ」
「了解」

第６艦隊が囮の艦隊を追いかけているスキに本隊は隕石に紛れながら、その場を離れていった。
「敵艦隊、囮の艦隊に付いていきます」
「戦艦（ディオメデス）を確認。敵は第６艦隊です」
「第６艦隊か。その他の艦隊に動きは？」
「第１艦隊はヘイストル艦隊と交戦中。第４艦隊はＡ１２宙域で待機中のもよう。第９艦隊は先ほどの宙域から移動していません」
「第１、第６、第９艦隊の脅威はないか。残るは第４艦隊のみか。参謀長、なぜ第４艦隊はＡ１２宙域に留まっていると思う？」
「おそらく、敵の総旗艦があの宙域にいるのではありませんか？だから、第９艦隊も先ほどの宙域から動こうとしないでしょう。あの宙域ならＡ１２宙域に近いですから」
「・・・第４艦隊の艦艇は、確か９１００隻だったな。ならば、Ａ１２宙域には近づかないでＡ２２宙域から脱出しよう」
「ま、待ってください。Ａ１９宙域にも敵の艦隊！！数は４０００」
「４０００隻だと！！馬鹿な。どこの艦隊だ？第８艦隊か？それとも第１１艦隊か？」
「どちらでもありません。戦艦（シヴァ）確認。第４艦隊です」
「第４艦隊の別働隊か。敵も簡単には逃がしてくれないか」
「し、司令！囮の艦隊がばれました。第６艦隊が反転してきます」

「なんだと！！」

敵の最後尾艦隊に追いついた第６艦隊は敵に攻撃を開始していた。
「カールセン提督。敵艦隊の最後尾、射程圏に入りました」
「攻撃開始だ。空母部隊は戦闘機の出撃準備」
「了解。全艦、攻撃開始。空母は戦闘機の出撃準備」
攻撃命令により第６艦隊の前衛艦隊を指揮するエレストロ少将の部隊３２００隻が敵艦隊に攻撃した。
「今から敵にミサイル攻撃をかける。その間に航空部隊第１陣は出撃せよ。航空部隊の攻撃が開始されたら、各艦は艦長の判断で任意に攻撃せよ。第１陣の攻撃中に第２陣は出撃準備。第１陣が帰還を開始したら、次いで第２陣が攻撃開始。航空部隊はなるべく一番前の敵に攻撃せよ。全部隊、ミサイル攻撃開始」
命令と同時にミサイルが発射され、次々と敵艦に命中するが、奇妙なことに敵は反撃どころかミサイルの迎撃もしなかった。
「司令。妙です？敵が攻撃してきません」
「奴ら、それほどダメージが酷いのか？それとも、何かの罠か？」
「航空部隊出撃準備完了しました。第１陣出撃します」
次々と空母から出撃する戦闘機部隊
「プファイル１よりマザー（管制官）聞こえるか？」
「こちらマザー聞こえるわ。どうしたの？」
「大事なことを聞くのを忘れていた。この後の予定どうなっている？」
「・・・プファイル１・・・い、今は戦闘中ですよ。無駄なことで呼び出さないで下さい」
「俺にとっては戦闘より、君とのこの後の約束のほうが大事だ」
「ど、ドルック大尉」
「名前になっているぞ。今はドルックではなく、プファイル１だ」

「では、プファイル１。戦闘中に無駄な通信はするな」
「トーデス１。い、いらしたんでしたね・・・」
「ああ。どこかの馬鹿が無駄な通信をマザーにしているんじゃないか心配でね。来てみれば、案の定この通りか」
「まあ、これは、その、戦闘前の儀式みたいなものですから」
「第１戦闘群第１戦闘隊第３中隊の中隊長は戦闘前にナンパをするのか？そうなれば、第１戦闘群の恥だな。中隊長の交代を考えねばな」
「冗談ですトーデス１。今度からは心を入れ替え任務に精進しますので、それだけはご勘弁を」
「ふん。何度同じ言葉を聞いたかな。まあいい。結果を出しさえすればな。期待しているぞプファイル１」
「了解。プファイル中隊。敵に攻撃を開始します」
戦闘機部隊の攻撃は迎撃を受けることなく簡単に敵艦を沈めていった。
第３中隊の数はたったの３０機であったが、５００隻ほどの艦艇を沈めたが敵からの反撃は１度もなく、この頃から第６艦隊司令部では囮艦隊の疑惑が持ち上がった。
その時にヘルゼンバーグ艦隊が隕石群の中から出撃したため、疑惑は確信に変わった。
「やられた。こちらは囮だ。エレストロ少将の部隊はこのまま囮艦隊に攻撃。残りは急速反転。敵を追いかける」
第６艦隊が急速反転して追いかけたが、すでに敵艦隊は戦場から離脱していた。

ヘルゼンバーグは決断を迫られていた。部下からの提案のあった作戦でいくか、別の安全な宙域から離脱するか。しかし、第６艦隊が戻ってきている以上別ルートからの離脱など不可能に近い。なら

ば、部下からの提案通りの作戦でいけばいいのであろうが、それでは無駄な犠牲を出す。
部下からの提案。それは、別働艦隊がＡ１９の艦隊に攻撃をかけるというものである。
しかし、Ａ１９宙域には４０００隻もの敵艦隊がいる以上別働艦隊は生きては戻ってこれない。だが成功すれば、残りの艦艇は安全圏まで撤退できる。どうするべきかヘルゼンバーグは悩んでいた。

今から数分前

「第４艦隊がいる以上Ａ２２宙域からの脱出は不可能だ。別のルートは？」
「現在捜索中ですが、あの宙域以外では全て地球よりのルートになります。別の敵艦隊と遭遇する可能性があります。」
「それに閣下。燃料がそんなにありません。これ以上遠回りのルートだと途中で燃料切れを起こす可能性もあります」
「Ａ１９宙域を通るルートが一番条件がいいか。強行突破はできそうか？」
「戦闘になれば、突破したとしても途中で燃料がなくなります」
「Ａ１９宙域を戦闘しないで突破する以外手詰まりになる訳か・・・」
「閣下。私に１つ案があります」
「どんな案だ？言ってみろ」
「はい。１００隻程度の艦艇でＡ１９宙域に攻撃をかけ、その間に本隊は当初のルートで脱出するというものです」
「その作戦では、攻撃をかけた艦艇は生きて帰れないぞ。誰がそんな死にに行くような役を引き受けるのだ？」
「私がその任を引き受けましょう。私の艦隊は１３０隻程度で数は丁度いいし、全艦が損傷を受けています。このまま撤退したとしても途中で脱落する可能性もあります。味方の撤退の足を引っ張る程度ならばここで味方の撤退を援護した方が我々も本望です」
「准将！！」

「それに閣下。私は先の第４艦隊との戦闘で艦隊の８割を失いました。私に部下の弔い合戦をさせて下さい」
そして今に至る。
「・・・分かった。貴官の作戦でいく。准将。別働隊の指揮は任せたぞ。君の行動次第で我らが脱出できるかどうか決まるのだからな」
「了解しました閣下。それと・・・お世話になりました。ダイス帝国の勝利の瞬間を見届ける事ができないは残念ですが、先に行って待っております」
「准将の死を無駄にしないためにも本国に戻って艦隊を立て直す。そして、連邦の奴らを必ず倒してみせる。それまでは必ず生き残ってみせる」
こうして、１３０隻の艦艇がＡ１９宙域にいる敵艦隊を攻撃している間に本隊は無事にこの宙域を離脱できた。

Ａ１９宙域に待機していた第４艦隊が少数艦隊を見つけるのは容易かった。
「司令、敵艦隊きます。数は１２０～１３０隻ほど」
「航空部隊で攻撃すればいい。航空部隊を突破した敵艦だけ砲撃すればいい」
「了解。航空機部隊出撃せよ。繰り返す。航空機部隊出撃せよ」
空母より次々と航空機部隊が出撃していき、出撃から１２分後に戦闘が開始された。
「第１波攻撃で、敵艦２０隻ほどが撃沈。続いて敵艦接近。数は１５隻」
「攻撃せよ。無駄弾を撃つなよ。正確に狙えよ」
航空機部隊を突破した艦艇は攻撃できるほどの力は残ってなく、敵艦からの攻撃で次々に撃沈していった。
「航空機部隊帰還します。損害はありません」

「了解。残存の敵艦隊は？」
「残りは５０隻程度です」
「攻撃は前衛部隊の砲撃のみでいい。後は周辺の警戒」
「了解。前衛部隊攻撃を継続せよ。残りは周辺の警戒を怠るな」
「たった１００隻程度で攻めてきた理由は何だと思う？三島」
「・・・後退のできない敵の最後の悪足掻きではありませんか？」
「違うな。陽動だよ。味方を逃がすためのな」
「は？陽動？味方を逃がすとはどういう意味でしょう？」
三島が司令官に言葉の意味を聞こうとした瞬間にオペレーターが割り込んできた
「司令。Ａ２２宙域に敵艦隊発見。数は１０００隻以上いますが、こちらには向かってきません。逃走するつもりです」
「なんだと！！迎撃だ迎撃。航空部隊と足の速い艦艇で追撃せよ」
とオペレーターからの報告に急いで指示を飛ばす三島
「かまわん。放っておけ。もう戦闘するだけの元気は残っていないだろ」
「しかし司令！！叩ける時に叩いとおかねば」
「たった１００隻で我々の足止めをしようと勝ち目のない戦いを挑んできた艦隊がいるんだ。そいつらに免じてここは放っておいてやれ」
「・・・了解しました。追撃中止。航空機部隊も出撃中止だ」
「司令。敵の殲滅を確認しました」
「了解。総司令部に連絡。我、敵艦隊と交戦するも１０００隻ほどの艦隊を取り逃がしたと。我々も総司令部まで戻るぞ」
こうして、ヘルゼンバーク艦隊は戦場を離脱することに成功した。
多くの犠牲を払ったが・・・

第３４話月面攻略作戦～第２次防衛線？～

ダイス軍月面防衛の第２防衛ラインでの戦闘は連邦軍が圧倒的優勢であった。すでにダイス軍はバイタン少将、バルトン中将は戦死し、テリスリー大将、カメイル中将は月軌道艦隊と合流のため後退。そして、ヘルゼンバーグ中将は、月基地防衛の任務を放棄して戦場からの離脱。現在ヘイストル上級大将の艦隊のみが第２防衛ラインで戦闘を続けているだけであり、もはや第２防衛ラインの陥落は時間の問題であった。

「・・・第２戦隊の全滅を確認。第２戦隊のビュウレン少将戦死」

「第３３補給艦隊はレイゼル機動部隊への補給を開始せよ」

「第２８空母部隊の残存兵力は、第１４空母部隊に合流せよ」

ヘイストル艦隊の旗艦ではオペレーターが次々と指示を飛ばしていた。

「閣下。艦艇数はすでに１万を割り込みました。このままでは、艦隊の全滅は時間の問題です」参謀長は現在の状況をヘイストルに報告した。

「現在の戦力と生き残っている将官の数は？」

「はい。艦艇数は９２００隻。分艦隊司令官は１８名おりましたが、副司令を含めて７名が戦死。４名が行方不明。１名が意識不明の重体。健在なのは、中将２、准将４の計６名です」

「・・・浅羽中将を臨時の副司令官任命。バーレ、奥野両准将は浅羽中将の指揮下に入れ。クリス中将の艦隊は全て高速機動艦隊に入れ替えてレイゼル准将はその配下に。司令部直属の指揮官としてマキナ准将を入れる」

「了解しました。直ちに指示を出します」

こうしてヘイストル艦隊は艦隊の再編成による迎撃の準備を始めた。

一方の連邦軍第１艦隊司令部も敵艦隊への総攻撃のため、補給と部隊の再編をしていた。
「・・・第１２ミサイル艇群の補給完了。続いて、オルベルト副司令の艦隊も補給が完了しました」
「艦隊の補給は９２％まで完了。艦隊編成は９８％まで完了」
「第２機動艦隊の第５機動艦隊への編入は完了。第３機動艦隊の第５機動艦隊への編入はどうなっている？」
「あと５分で第５機動艦隊への編成が完了します」
「この調子でいけば、あと２０分で準備が完了します。トダカ司令」
「分かった。全艦に伝達。第１艦隊は３０分後に敵艦隊への攻撃を開始する」
「了解。司令部より第１艦隊全軍に伝令。３０分後に総攻撃を開始する。繰り返す。３０分後に総攻撃を開始する」
第１艦隊の兵力は開戦当初１万５０００隻あったが、たび重なる戦闘で一時は１万隻以下まで落ち込んだが、第８艦隊のアベル少将の艦艇２５００隻と第１１艦隊６８００隻が第１艦隊に緊急編成されたため、第１艦隊は開戦当初を上回る１万８０００隻にまでになっていた。加えて、本国から大規模補給艦隊が来たため、第１艦隊は補給も戦力も万全の状態で戦闘をすることができた。

３０分後に連邦軍第１艦隊はヘイストル艦隊に攻撃を開始した。
「ヘイストル閣下。前衛の浅羽中将が敵との交戦を開始しました」
「前衛部隊は後退しつつ右翼部隊と連携して対応せよ。左翼は本隊から８００隻の艦艇を割いて警戒にさせよ」
「了解。こちら司令部。前衛部隊は後退しつつ右翼部隊と連携して迎撃せよ。前衛部隊は後退しつつ右翼部隊と連携して迎撃せよ」
しかし、通信妨害により前衛部隊に正しく命令が伝わらなかった。

「・・・こちら司令部。前衛部隊はこう・・・よく・・・せよ。前衛・・・・たい・・・・・よ」
「こちら浅羽艦隊。司令部。ノイズが酷くて聞き取れない。もう一度頼む」
「こ・・・ちら・・・司令・・・部・・・きこ・・・えない。・・・どうし・・・た？」
「くそ、だめだ。中将閣下。ノイズが酷くて司令部と連絡がとれません」
「最初に司令部はなんといってきた？」
「ノイズが酷くて聞き取れませんでした」
「命令が分からないのであれば、迂闊に行動などできん。前衛艦隊はこのまま敵艦隊を迎撃する」
「了解。前衛艦隊は現状維持せよ。前衛艦隊は現状を維持せよ」
前衛艦隊が後退しないため、迎撃の準備をしていた右翼艦隊は攻撃ができずにいた。
「なぜ前衛艦隊は後退しないのだ。こちらが攻撃できないであろう。前衛部隊を呼び出せ」
「無理です。妨害が激しくて前衛どころか旗艦とも連絡が取れません」
「なら、伝令のシャトルを送れ」
右翼艦隊のクリス中将は前衛艦隊の浅羽中将に伝令のシャトルを送ったが、激戦の中でシャトルは攻撃を受け、撃沈した。
「シャトルの信号ロストしました」
「もう一度送れ。今度は2隻だせ」
再びシャトルを送ったが、また攻撃を受け撃沈してしまった。

このようにダイス軍で命令がうまく回っていない間に第1艦隊は次々と敵艦艇を葬っていた。

「アベル機動艦隊。敵前衛部隊の一部を本隊との分断に成功しました」
「第１機動艦隊。損耗率２８％させど、戦闘に支障なし」
「オルベルト分艦隊が奥野艦隊に攻撃を開始しました」
「第１空母部隊に続き、第２空母部隊も艦載機の出撃準備が整ったとのことです」
「了解した。第１機動艦隊はアベル機動艦隊の援護に回れ。航空機部隊は敵、奥野艦隊への攻撃を最優先に」
「了解。第１機動艦隊はアベル分艦隊の援護に回れ」
「航空機部隊。出撃準備。目標は奥野艦隊。それ以外は後回しにせよ」
「トダカ司令。敵の右翼艦隊への攻撃はしなくてよろしいのですか？」
「敵の右翼は艦隊構成から見て高速艦艇で編成された部隊だ。その艦隊が攻撃もせずにあの場所にいるということは、間違えなく敵の配置ミスだ。この場は放置して敵前衛部隊に攻撃を集中すればよい」
「なるほど。分かりました」
「ああ、それと、コーヒーを1杯頼む。砂糖もミルクも入れない濃いやつを」
「了解しました。直ちに」

敵艦隊から猛攻を受けている奥野准将は防御するのが精一杯だった。
「戦艦撃沈（シュトナ）。戦艦（アイゼン？）通信途絶」
「艦隊戦力５０％を切りました」
「敵航空部隊の攻撃により、菊池大佐率いる艦隊１８０隻が全滅。戦線が維持できません」
「佐々原大佐の艦隊が増援を求めていますが、どうさせますか？」

「我に余剰兵力なし。現有兵力で持ち場を死守せよ。中将の旗艦とは、まだ連絡が付かんのか？」
「駄目です。妨害が酷く、先ほどより酷い状況です」
「敵艦接近。戦艦２、駆逐艦５。距離３０です」
「護衛艦隊で迎撃せよ。それと、戦線を縮小して中将の本隊まで合流するぞ」
「佐々原、池田、根本艦隊全滅。敵に退路を絶たれました。合流は無理です」
「艦隊を集めろ。このままでは、各個撃破されてしまう」
「護衛艦隊被害甚大なれど敵の撃退に成功しました」
「新手の敵艦接近。今度は戦艦６巡航艦８。それに航空機およそ２５」
「対空、対艦戦闘用意。１隻１機たりとも生きて返すな」
「間に合いません。ミサイル来ます。回避不可能」
「総員、衝撃に備えよ」
しかし、ミサイルの１発が弾薬庫に直撃し奥野准将は戦死した。
その２０分後にはバーレ准将も戦死。次いで１時間後には右翼部隊のレイゼル准将も戦死。
クリス中将は自身の負傷と敵に包囲されたため降伏。右翼部隊は活躍の機会が無いまま指揮官を失い壊滅。それから１時間４０分後には前衛部隊の浅羽中将が戦死。左翼艦隊のマキナ准将は形勢が不利になると直ぐに降伏した。残存将官４名が戦死。２名が敵に降伏してしまい、ヘイストル艦隊は９２００隻から１７００隻にまで減少してしまったが、司令官のヘイストル上級大将は降伏を拒否して最後まで抵抗した。３時間後にはヘイストルの旗艦が撃沈。ヘイストル艦隊は降伏したが、駆逐艦７隻しか残っていなかった。
　１１月２１日、連邦軍総司令部は、敵艦隊の全滅を確認したと同時に全軍を第２次防衛線と最終防衛線の中間地点に集結を命令した。長い時間と多くの将兵の犠牲の末ようやく連邦軍は月軌道艦隊との対面を果たした。

第３４話月面攻略作戦～第２次防衛線？～（後書き）

５回に分けて書いた第２次防衛線もようやく終了しました。現状次の話はいまだに決まっていないためもしかしたらまた連載が止まるかもしれませんが、なんとか今年中に月面攻略戦を終わらしたいと思うので頑張ります。

次回もよろしかったら、是非読んでいただけたら幸いです。

第３５話月面攻略作戦～テリスリー死す～

連邦軍第１次月面攻略艦隊は、第２次防衛線上に展開していたダイス軍艦隊を破り最終防衛線上に展開している月軌道艦隊との戦闘に備えていた。
現在の連邦軍艦隊の残存戦力は以下のとおり
第１艦隊艦艇１万６０００隻
第４艦隊艦艇９０００隻
第６艦隊艦艇８８００隻
第９艦隊艦艇１万１８００隻
第１０艦隊艦艇１万１０００隻
第１２艦隊艦艇９３００隻
第１８艦隊艦艇８８００隻
７個艦隊合わせて７万４７００隻と以前として７万隻を超える艦艇を有していた。

一方のダイス軍は、月軌道艦隊２万３０００隻とテリスリー艦隊７０２０隻。カメイル艦隊２３２０隻。それと、戦死したバイタン艦隊１２８０隻とバルトン艦隊１００隻の艦艇３万３７００隻と数の不利を覆すことが最後までできなかった。
「・・・では、テリスリー艦隊にバルトン艦隊の残存戦力をカメイル艦隊にバイタン艦隊の残存戦力をそれぞれ編入するということでよろしいですかな？」月軌道艦隊司令のアバエル上級大将がそれぞれに確認を取った？
「ワシはかまわんぞ」「私も」テリスリー、カメイルにはこの編入に問題はなかった。
これでテリスリー艦隊は艦艇７１２０隻。カメイル艦隊は艦艇３６

００隻となり、なんとか各艦隊の戦力を整えることができたが、敵との戦力差は以前倍近くあった。
「艦隊編成はこれでいいとして、問題はどう敵に対して防衛戦を戦うかじゃな？」テリスリー大将は他の提督に作戦案を求めた。
「・・・月軌道艦隊による集中砲火で敵を分断し、その間にテリスリー閣下の艦隊と私の艦隊で敵を各個撃破する。これが、今できる最善の策ではありませんか？」
「ふざけるな！！先の防衛戦で、５個艦隊投入してたった２個艦隊しか倒せなかった貴様が敵を各個撃破する？そんなことができるのか？」
「あ、あれは、敵の数が多く、味方の連携もうまく取れなかったせいであり、あの時はあれが我々にできる精一杯の戦闘でした」
「偉そうなことをいうが、その２個艦隊を倒したのはヘルゼンバーグの艦隊ではないか。貴様の艦隊など敵にやられそうなところをテリスリーに助けられただけであって、なんの役にも立たなかったではあいか！！」
「そ、それは・・・」
「もう貴様に用はない。さっさと自分の艦に戻って艦隊編成と補給を済ませておけ」
カメイルの作戦案はアバエルの機嫌を悪くしただけで、カメイルは会議室から追い出された。
「しかしアバエル提督。カメイルの作戦案も捨てたもんではあるまい？少し改善すれば使えると思うんじゃが？」
「テリスリー。甘やかしてはいけない。あいつは艦隊司令官とは名ばかりの後方参謀ではないか。あんな奴の作戦など敵も考えてるはずだ」
「ではどうするんじゃ？他によい案でもあるのか？」
「『ヴェリフィツィーレン砲』を使う」
「なんじゃと！！要塞砲である『ヴェリフィツィーレン砲』を使うのか？しかし、こちらの艦隊が一斉に退避したら敵さんにも気づか

れるじゃろ」
「そのためのカメイル艦隊であろ。あの艦隊を囮に使う。カメイル艦隊を利用して2、3個の敵艦隊を要塞砲で吹き飛ばす」
「味方を犠牲にする必要はないはずじゃ。それにアバエル提督。提督は皇帝陛下よりお預かりした艦隊をこの宇宙から消し去るつもりか？」
「今ここで『アン・グライフェン基地』を失えば今度は本国が戦場になる。そうなれば、今の何十倍という兵士が死ぬ。それを考えたなら、ここで十数万人の犠牲は仕方あるまい」
「・・・どう合っても『ヴェリフィツィーレン砲』を使うと言うのじゃな？」
「当たり前だ。ここで使わなければ、月基地を失うことになるからな」
「そうか。・・・ならもう話すことはない。ワシは月基地に戻る。こんな事で部下を失うわけにはいかないからな」
「テリスリー大将。どう合っても賛同していただけないか？」
「ワシはこの戦争が始まったときからダイス軍兵士として連邦軍と戦ってきた。ダイス帝国に正義があると。今回の戦闘は連邦政府が宣戦布告なしに月面基地『フォーレ』を攻撃してきたのと同じくらい胸くそ悪い戦闘だ。何と言おうがワシは月基地に戻るぞ」
テリスリーは自分の艦に戻るため、会議室を出ようとした。
その時、「バン・・・」という音がした。テリスリー大将の胸元が赤黒くなりだし、口から血を吐き出して、その場に崩れ落ちた。
「・・・残念だよテリスリー大将。あなたは私の憧れだったのに・・・」
「あ、アバエル・・・ワシを殺しても・・・意味は・・・ないぞ・・・こ、この戦闘は・・・ま、負ける・・・な、なぜ・・・なら・・・味方を・・・犠牲にした・・・作・・・戦など、・・・・うまくいくはずが・・・ない。・・・なぜそれに・・・気づかんの・・・・じゃ？・・・・」

テリスリーの目から段々と光がなくなっていく中で、老兵は最後まで若い上官を諭そうとした。
「・・・安心してくださいテリスリー提督。この戦は勝ちますよ。敵を滅ぼしてね」
老兵を殺した上官の口から笑みがこぼれていた。
このあと、ダイス軍にテリスリー大将の負傷によって基地まで後退した事と、後任にアバエル艦隊のレーゼン大将が指揮権を引き継ぐ旨が発表された。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5415b/

宇宙戦争

2011年12月14日00時50分発行